

香川日独協会会報

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

KAGAWA

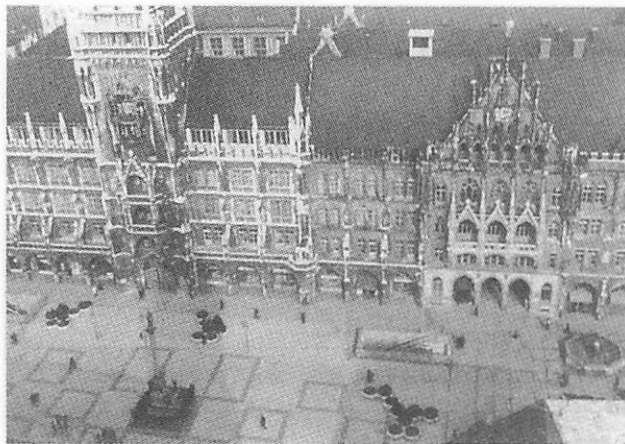


第12号

März 2005

目 次

München 邂逅 -----	中村 敏子	3
「GLÜCK」の1年を振り返って -----	加藤 元規	6
私のドイツ -----	川崎 昭子	8
ドイツとの出会いの中で・・・ -----	倉光 貴子	9
私のドイツでの記憶 -----	土井一三（タダノ）	15
TV番組制作現場的一幕 -----	野崎幸三（ルーヴ）	20
第11回香川チター音楽祭 -----	中井 護	22
ごあいさつ -----	大坂靖彦（ビッグ・エス）	23
ワインと平和村の子供たち -----	西川晃司 元木公美子（ビッグ・エス）	24
私の生涯事(自)業 -----	笠井 強	32
俘虜たちの悲しみと楽しみ -----	間島 由佳	33
Freundschaftsreise nach Takamatsu -----	Marianne Mönch	34
Ausflug nach Shodoshima -----	Barbara Meise	36
Kontakte mit Mitgliedern der JDG Kagawa im Jahr 2004 -----		38
平成15年度香川日独協会事業報告 -----		39



München 邂逅

中村 敏子

あれは1975年の春にさかのぼる。広い緑の畠のなかに点在する赤い屋根のありさまをゆっくり降下する飛行機の中からみて「これはまさにお伽の国だ！」と驚喜した。Frankfurt a.M 空港到着までのあのパノラマは今に忘れられない。5月の最中ドイツの一番美しい時期でもあった。この日から私のドイツ遍歴がはじまりもう30年になる。

文部省在外研究で滞在中の夫を尋ね、アンカレッジ経由で子供をつれての旅はかなり疲れたがそれからの日々は「ドイツを知ろう」と毎日を駆け抜けるように過ぎていった。München で暮らす日本人がまだ少ないころで、子供たちをつれて街にでると老人たちが集まってきた。黒いまっすぐな髪の毛をなで黒い瞳をのぞきこみ「日本人か」と親しそうに声をかけてきた。

Marienplatz からS6番の電車で20分位のところに借家のPOST家はあり三角屋根に地下室のある典型的なこの家の家主は夫婦とも歯科医だった。医院は大仰な看板があるわけでもない、表札がわりのプレートにそれとわかる書き込みがあった。すべて予約制のその医院はひっそりとしていて 午後からの診療はなく夫婦そろってテニスに出かけていた。当時日本では珍しい「糸楊枝」の使い方を教えて頂いたがその時は違和感がありなじまなかった。この家族は夏に2ヶ月の休暇をとり地中海沿岸の保養地へさっさとでかける。

日常はごく質素であるが、住いには思い切り良質の家具調度品が整えられそれを主人がとくとくといわれを説明して聞かせた。電子ロックの扉に守られた彼らのマンションは当時私達にとって珍しかった。

大広間の四方の壁に張りめぐらされたペルシャ絨毯に圧倒され落着かなかったのも思い出である。夫人の弾くチェンバロの音色に癒され、食事中は子供たちが母親の指示で娘を気遣い珍しい料理を身振りでおもしろく説明してみせた。

娘たちとよく似た年格好の3人の子持ちで特に一人娘のウルリケが活発に積極的に我が家に遊びにきた。彼女は私たちの格好のドイツ語教師となった。私の発音がおかしいといっっては指で自分の舌をねじまげてみせ何度もくりかえし発声練習をしてくれた。今、彼女は歯科医となり実家の一駅向こうで開業しているときく。

前庭には大きなさくらんぼの樹、りんご、梨、野いちごなどふんだんにある木々の間をりすがかけぬけた。裏庭は20Mはある樅の樹にかこまれた屋敷内で薄暗くこのあたりの家並みも同じように樹樹にかこまれた静かな一角をLochham といった。

電車の駅が近く便利であったのと、この沿線にLudwig II世王が侍医とともに入水したという悲話をもつSteinberg湖があり、その中にうかぶ小島によくでかけた。高級保養地であるここはヨットが湖上をゆったりとただよい水鳥の浮かぶ別天地であり、ドイツ語を使わなくていい寛ぎのひとつときであった。

Bayern 放送交響楽団員の日本人ご夫婦、同じ文部省から留学中の U 教授一家など知り合いになりことに U 家の 3 人の子供たちとよく遊んだ。小犬がじゃれあうようにして遊んだのもつかの間でそれぞれの立場で帰任し、便りも途絶えていた。

帰国してから子供の教育については考えさせられた。当時全国学力テスト日本一の香川では児童生徒の学力について随分と熱心で帰国した子供たちはなにかにつけて留守にした間の補習を課せられていた。平成の今はいかがなものだろうか。

数年前のこと、視察旅行で来県中の在日ドイツ大使館の S 公使ご夫妻との会合で大学関係者、日独協会有志が席をとともにした。

若い学者たちのはずむような笑い声と公使の飾らぬお人柄に皆気持ちがなごみ時間をこえて話がはずんだ。その帰りぎわに たまたま若い学者の一人と話す機会があり先生の口から自分は 1975 年子供のころドイツにいたということを話された。学者の家はよくあることだからとそのときは聞き流していた。が、帰って年数をあわせてみると私どもの滞在時期とかさなることに気がつき名前をたぐってみるとどうも U 君らしいということに思いついた。

あの活発に走りまわり聡明であった U 家のご長男の姿が浮かびあがり、数日後やはり私の想いは的中していたことがわかった。ドイツで出会った利発な男の子が成人され学者として香川大学に赴任されている。人の巡り合わせの妙をお互いに感じあった。日をおかずに来宅くださりご家族の近況やドイツのことなど懐かしく話が尽きなかった。

あの大きな樹の枝がしわむほどなったさくらんぼへの郷愁と人のぬくもりをひしひしと感じた出来事であった。

そして又、昨年暮れ、中部地方の日独協会会長 I 氏から電話がはいった。この方は日独協会の全国日独協会連合会総会で 45 年ぶりに再会した大学時代の恩師でもあった。厚生労働省の仕事でドイツへ視察に行くにつけ BonnDJG の Dr.M 氏を紹介をして欲しいとの用件であった。先生がドイツ留学をなさったのはそれとなくわかっていたが、話をしているうちに 1965 年に München の Lochham に住まわれていたということが解かった。電車の駅をおりと線路のすぐそばで丁度私たちの住まいの反対側にあたるといふ。駄菓子やの前をとり数軒すぎたところで鬱蒼と茂る木々の間の家であったそう。やはり何年か前ご夫人と再訪して懐かしんだと承った。が最初の感慨が大きいほどその落差も大きいという方に複数であった。

子供たちの夏休みがはじまると、この地区の Kinderfest が集合住宅の空き地であり私たちも招かれた。総勢 30 名ほどの家族づれでいろんなゲームや綱引き、かけこ、卓球、布袋に入ったの蛙とびなどあちこちではじまり 親たちはビールを飲みながら談笑を繰り返していた。

夜10時も過ぎあたりが暗くなりかかるとどこからかフロアスタンドがはこびだされ灯がともされた。ふと気がつくとな女の子の服装が変わっている。単パン、水着ではしゃいでいた彼女たちが髪を梳かしロングスカートで出てくるのではないか。完全なレディとしての登場である。

いろいろな人たちの話しから、家庭でお財布を預かっているのはご主人であるということ、4年生で選択するギムナジウムへは大変厳しく家庭教師が来ていることなどが理解できた。そんな中の年配から私はずばりと指摘された。「この国へ来たらドイツ語で話すのが礼儀だ」と。つたないドイツ語を補うために英語で話したのが良くなかったらしい。こうしたことがあってからドイツ語を必死で覚えようと努力した。

しばらくしてこの老人に道で会った時 ドイツ語で話しかけると彼女が喜んで私に飛びつき抱きかかえられた。それでいいんだ とばかりに何度も何度も抱きしめられた。このご老人も私のドイツ語発憤の先生となった。



「GLÜCK」の1年を振り返って

加藤元規

初級ドイツ語を勉強したいという問い合わせが香川日独協会の女性会員から多く出ているので、講座を開いて欲しいとの依頼を受け、図らずもその講師を引き受けた次第です。場所は県庁の裏通りでピアノの先生をしておられた福田先生の教室を借りて、昨 2003 年 11 月からドイツ語初級講座（会話）「GLÜCK」を始めました。

講座の「GLÜCK」は中村会長が名付け親です。ボランティア同然で部室をお借りしている福田先生の福を戴いて「GLÜCK」でありますようにとお決めになった経緯があります。会の運営は協会からの金銭的な支援を得ていないが、開設まで会長には部屋探し等で特別なご尽力を賜った。会の運営にあっては広報委員会の野田委員長と松本広報委員が中心で取りはからってくれています、勿論、これまで多くの会員皆様の励まし並びに心強いアドバイスに支えられ今日まで参りました。

第1回目は受講者8名でスタートしました。その後、一時的に5名まで減ったので参加者の負担を軽くするため、現在は月3回を2回に変更しています。

2004年12月現在で女性6名+男性1名の計7名で和気藹々と、Kaffeepauseも含めて月2回：木曜日 13:30～15:15分まで会話を中心に実用的な楽しいレッスンを行っています。

メンバーの中に当初はドイツ語のイヒ・リーベ・ニヒ(ディヒ)しか知らないはと言う方もあり、殆どが初級の方々でした、最初の半年は様子見もあり、ドイツの小学1年の教材、外国人向けドイツ語初歩講座の頁を適宜にプリントしたものをテキストとして使用していました。昨年の *Weihnachtsparty* の行事には教室で練習したクリスマス・キャロル3曲も披露できました。今でも時折、有名な *Volkslied* を授業の一環として少し勉強しています。

かような授業内容のために最初の半年間は毎週ごとに話題が大きく変わるので、受講者にとってはかなり難しかったのではと振り返って反省していますが。その反面、ドイツ社会について実践的なミニ知識を幅広く習得して戴いたと思っています。宿題も毎回出していましたが、今は全然なしです。皆さんフリーが宜しいみたいです。今はテキストとして東進ブックス「今すぐ話せるドイツ語」を利用しています。

そんな中で毎回一番気になるのが、どの程度理解してくれているだろうか、どの程度ドイツ語に興味を抱き続けてくれているだろうかと言うことです。最近では時折、今日は楽しかったとか *alles klar* とかの言葉が返るようになりチョットばかり安堵しています。

2004-12-16日には授業後 *eine kleine Weihnachtsparty* を行いました。これにより一層親睦が深められたものと確信しています。最後に掲載した写真はパーティのメンバー皆様の様子です。和やかな雰囲気を読み取って頂ければ幸いです。

今後もドイツ語の会話や日常生活や語彙・宗教・歴史をその都度、余談を加えながら進めて行きたい所存です、将来の夢はみんな揃って訪独する機会があればな～と考えています。

今後とも何卒宜しくご鞭撻の程お願い致します。

(初級ドイツ語講座 「GLÜCK」 専任講師)

添付写真－ 1

2004.12.16 GLÜCK の X'mas Party



添付写真－ 2

GLÜCK 授業終了後の風景



以 上



私のドイツ

私のドイツは、十数年前の誕生日に贈られた一台のドイツ製オルゴールから始まりました。そのオルゴールは、ねじ巻き式と違って、細長いカードを差し、ハンドルを回しながらメロディを奏でるという物です。つまり、カードの枚数だけ音楽を楽しむことができる便利な楽器でした。

贈り主は、2択でブラウスカオルゴールのどちらかをたずねてきました。ここでオルゴールを選んだ事から少し大げさですが、私の進む道が開かれたような気がします。早速なじみの歌をオルゴール用に編曲してみました。

その頃作った「春が来た」「夕焼けこやけ」等の曲は、当時寝たきりであった川崎の母がよく廻しました。入院している時には病院へ持って行き、お部屋の方々と楽しみました。オルゴールを伴奏にして皆で一緒に歌っていると、向かいの部屋からも歌声が聞こえてきて、思わず笑みがこぼれ、お互い顔を見合わせる場面もありました。1台の小さなオルゴールが繰り出すやさしい空気が、病院で過ごされる方々のお気持ちを1つにするという、何か不思議な力と感動を覚えました。そして、高齢時のフリータイムの過ごし方を含めて、将来の自分を模索していた時期であったことから、求めていた目標に辿り着いた気がいたしました。

それからオルゴールについて調べる内に、ドイツの玩具に出会いました。これも又ステキなものばかりで、すっかり魅了されました。オルゴールもそのアイテムに入っていました。

そんな折、世界最大とされる TOY メッセ(ドイツ、ニュルンベルグ)に行かないかとの誘いを受けました。勿論、迷うことなく行きました。これが私のドイツへの第一歩です。

以来毎年出かけることが数年間続きました。1回目に残した目的を2回目で、2回目での事は3回目でと連鎖的になったのです。当初は TOY メッセと観光の地ドイツでしたが、いつしか好きな音楽を追い求めるようになっていました。ドイツの音楽と言えばクラシック音楽を誰もが思い浮かべますが、これとは別に民族的音楽が、それ以前の長い歴史をもって、現代大衆文化として確立され、幅広くそして深く根付いています。人の集まる所に音楽ありき。歌があり、ダンスもありの軽快な音楽が、街角やビアホールで溢れんばかりに鳴り響きます。ソーセージやジャガイモ料理を前にして杯を挙げながら味わう醍醐味は、日常ではなかなか経験できません。

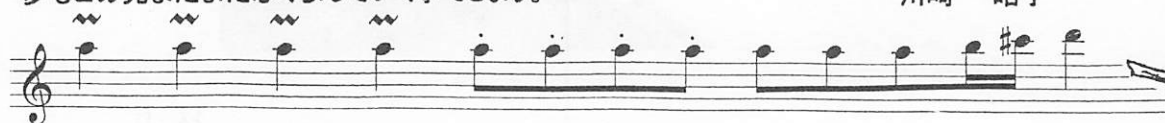
先述のオルゴールにも民族音楽を取り入れ、人形劇をミュージカル風にしたり、童話の読み聞かせの導入や朗読のバックミュージックとして、使用範囲もかなり広がりました。

レンドラー、ワルツァー、ポルカ等の音楽を気軽に演奏する方が、日本でも出て欲しいです。今では民族楽器とその楽譜を見ることが目的で、ドイツへ出かける事が多くなっています。

丁度1ヶ月前の11月7日、国分寺町の女性会館で「ちいさな音楽会」という催しがあり、ハックブレット二重奏、チターとハックブレットの合奏をさせていただきました。

ドイツの香りを少しでもこの地に漂わせ、陽気で楽しい音楽文化を知って戴く機会になれば、私の夢もこの先まだまだふくらんでいく事でしょう。

川崎 昭子



ドイツとの出会いの中で・・

2005 年 2 月

倉光貴子

1. 1998 年 2 月 28 日

今から約 7 年前の 1998 年 2 月 28 日、私はその前の年に香川大学とドイツのヴィースバーデン大学の間で結ばれた交換留学協定のもと、交換留学生としてドイツに向かいました。私は 20 歳までは実家のある山口県の宇部高専という学校の経営情報学科で経営学や情報処理を学んでいましたが、引き続き経営に興味があったため、香川大学に編入学して大学 3 年生から香川で学んでいました。高専時代からドイツ語を選択していたので、香川に来てからも大学の講義、そしてアイパルの高木先生のクラスでドイツ語を学んでいたところ、高木先生のご尽力で叶った大学間の交換留学協定により、留学の機会を頂きました。

留学以来、2 月 28 日は私にとって誕生日に次ぐ特別な日になりました。というのも、7 年前のこの日、私はドイツに旅立ち、それから 1 年後の全く同じ日に日本に帰国したからです。今では、この日には何かがスタートする日だというイメージがあります。ドイツに出発した日もそうでしたが、ドイツを惜しんで泣きながら帰国してきたその日も、後から振り返れば、その次の一歩を踏み出すことになったという意味では、やはり旅立ちの日となりました。

ドイツ留学に向けて日本を出発する日の朝、空港まで見送りに来てくれた父はいつもの笑顔でしたが、母はずっと心配そうな顔をしていたことを今でも覚えています。ドイツが大好きな父は、ドイツの写真やビデオをたくさん持っていて、昔からヨーロッパのことをいろいろ話してくれました。そんな父は私のドイツ留学を自分が留学するかのように喜んでくれましたが、母は 1 年前に編入学のために高松へ行っただけの私が、次はドイツへ行くと言い出したので、「どんどん遠くに行ってしまうて・・」と思ったに違いありませんでしたが、それでも、そんなことは一言も口に出さずに送り出してくれたのでした。

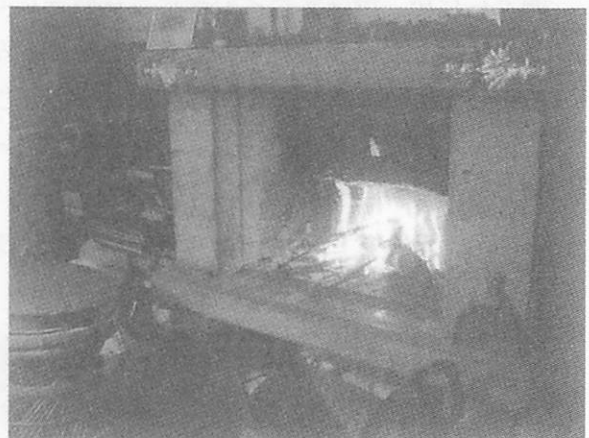


2. ドイツの家族、ドイツの友人

いろいろな想いを胸にして向かったドイツでしたが、はじめの一週間は入居予定の寮の建築が済んだばかりの状態です。電気と水が使えず、ひとまずは住む場所がありませんでした。そこで受け入れ先の大学で日本語を教えている Eva さんが、自宅の一室に私を住まわせて下さることになりました。

Eva さんのお宅での一日は、まず絞ったオレンジジュースを飲むことからスタートしました。それから、ドイツパンやヨーグルトをいただき、最後はアールグレイの紅茶を飲んで、それぞれ学校や仕事に行きます。Eva さんの家族は、旦那さんとお嬢さんの3人家族でしたが、私も家族の一員のように仲間に入れて下さいました。Eva さんの家族とは散歩にもよく出掛けましたが、Eva さんたちの自然に触れながら歩く習慣はすっかり生活の中に取り入れられていました。寮が一緒だったクラスメートも、勉強の合間や寝る前、休日など、リフレッシュするためにはいつも散歩をしていて、よくつきあったものです。ドイツの人々の日常に、散歩が定着していることも、こうして身をもって感じました。今では、私も散歩するのが大好きです。

Eva さんのお宅で夕食をご馳走になると、そのあとは決まろうそくを付けたり、温かみのある灯りがともされ、そこにはとても心地よい雰囲気が醸し出されていました。また、おしゃべりしているうちに、旦那さんがいなくなったかと思うと、いつも決まって奥の部屋からチェロを練習する音が聴こえてくるのでした。家族皆忙しいのに、寛ぎの時間を必ず持っている Eva さんのお宅は本当に素敵でした。



ドイツに住んで、Eva さん家族やたくさんの友人に出会い、更にドイツが好きになったのは言うまでもありません。ドイツの家族からは、ドイツの人々が普段どんな暮らしをして、どんな考えをもって暮らしているのかを知ることができました。ドイツの友人と語らう中では、異なる文化や習慣、価値観を知りました。そのことは、それまで私がもっていた、〇〇はこうでなければならない、とか、こうであるべきだ、という決まりきった考え方を変えて

くれました。ああ、そういう考え方もあるのか、とか、そんな考え方もいいな、とずっと柔軟に思ったり考えたりできるようになりました。勿論、それは嫌だな、と思う考え方もありましたが、でもそれはそうとして、まずは相手の考えを受け入れて、そこから再び考えて自分なりの意見を持つ、という癖がついたように思います。特に各国からの留学生は政治も経済も違う国で生まれ育っているので、思考が違って当たり前だと思うのですが、それでも理解し合い、意見を交換し合える友人たちは、帰国してから私の大事な友人です。

ドイツのEvaさんたち家族や、ドイツで出会った友人たちのお蔭で、それまで知らなかったドイツやその他のヨーロッパの国々、人々、習慣、そして価値観に触れることができ、それは本当に貴重な体験でした。



3. ドイツで見つけた自分

ところで、ドイツに留学していた時「今まで知らなかった自分に会う」という興味深い経験もしました。全く違う環境に身を置き、ドイツの人々や、様々な国からの留学生とのふれあいの中では様々な場面に遭遇しましたが、それぞれの場面で出てきた自分の考えや思い、感覚はそれまで気付きもしなかったことでした。例えば、シェーン（美しい）という単語を、どんな場面で使うか感覚的に理解したとき、何ともいえない喜びを感じました。辞書をひけば、当然いくつかの訳がでてきますが、ドイツ人が実際にどのように使っているか体感して、自分もそのように使いはじめたとき、それを嬉しいと思う自分がいました。

そして、出身国の違う学生が集まって、ドイツ語を共通語として何かを話したとき、そこには感動がありました。バックグラウンドの違う学生が「ドイツ語」によってのみつながり、それぞれが、自分の知っている、限られた語彙の中から言葉を選び、思いを伝え合おうとする試みは、目には見えませんがその瞬間を皆で作りに上げているという感じがあって、それは感動に値するものでした。そんな経験から、更にドイツ語が好きだと思う自分に出会い、ド

イツ語によって互いの意見を交換できるということ自体にも喜びを感じていることにも気付きました。

また、人に喜んでもらえる喜びを深く知ったのもドイツでだったように思います。例えば、「日本の午後」と銘うって、日本語を学ぶ学生に日本を紹介する時間を、同じく香川大学から留学した明神実枝さんと企画しましたが、二人で巻いた巻寿司をドイツ人がとても喜んでくれたのは予想外のことでした。それからは学校でも、友人宅でも、寮でも、何度巻寿司をつくったか分かりません。皆さんに喜んでいただけるのは、本当に嬉しいことでした。ドイツを訪れると、みんなの喜ぶ顔がみたくて、私はきっとまた日本料理を作るはずです。



4. ウィンターハルターという職場

さて、ドイツがすっかり好きになった私ですから、職場もドイツに関連した会社を希望しました。ご縁があってドイツの業務用洗浄機を専門に取り扱うウィンターハルター・ジャパンに就職が決まったのは、大学を卒業する1年くらい前のことでした。就職してからの具体的な話を聞きに会社を訪れた時、千葉にある本社で話を聞いたあと、東京駅の近くにあるショールームに案内されました。ショールームは地下鉄の八丁堀駅から徒歩で3分ほどの距離なのですが、その駅からショールームに辿りつくまでの間に、我が目を疑う文字が目飛び込んできました。それは「入船屋」という緑色の文字でした。

ドイツに留学していたとき、同時期にガイゼンハイムワイン大学に留学中だった和田さんという方が私たちの住む寮でワインの試飲会を開催したことがありました。和田さんの卒業論文のテーマは「ドイツワインと和食の相性」に関するもので、研究データをとるため、日本人を集めてワインの試飲会を行ったのでした。

驚いたことに、新しく勤めることになったウィンターハルター東京ショールームのはず向かいで目にした「入船屋」さんは、その和田さんが帰国して経営するドイツワインを専門に取

り扱う酒屋さんでした。和田さんはご両親の店を継ぐために6年ほどドイツに滞在し、世界で3本の指に入ると言われているワインの大学で学んでいましたが、私が偶然入船屋さんの前を通りかかったときは、和田さんも留学期間を終え、酒屋さんを継いで働きはじめていたところでした。知らない街に来たつもりが、東京に来て初日からドイツ時代の知人に再会でき、ここにも思わぬ喜びがありました。

会社で私は企画管理室に所属して、展示会に出展する準備をしたり、広報活動を行ったりしています。プレス発表会や代理店会などの、会を企画したりもしますが、実はこれはドイツにいたときに自分たちで開いたいくつかの会での経験が役立っています。何かの会を開くとき、日時を決め、会場を決め、招待する人を決め、会の流れを考え、食事や飲み物の内容を考える・・・といった一連の作業には共通する部分があり、会を重ねる度に、段取りや注意した方がいいポイントが積み重なってきて、仕事以外でも何か会を催すのは私が好きなことの一つになりました。

ウィンターハルターでは、自分次第でチャレンジする機会をたくさん与えてもらえるので、やりがいを感じながら、楽しく働いています。ウィンターハルターという職場に出会えたこともドイツや様々な出会いに続く、嬉しいプレゼントでした。



6. そして2005年の2月28日に・・・

そして今年も、私にとっては特別な日である2月28日がやってきます。7年前に父と母に見送られて旅立った日のことも、1年後に皆との別れが悲しすぎて泣きながら帰国した日のことも、先に述べましたが、忘れず心に残っています。

私がいろいろな方たちに支えられながら過ごした街ヴィースバーデンを、昨年春、5年振りに旅しました。ヴィースバーデンはやはり5年前と同じように私を優しく迎え入れてくれました。再びヴィースバーデンの地に立ったときに感じた、「ああ、また帰ってくることができた！」という感覚はとても印象的でした。滞在中はずっとEvaさんのお宅にお世話になり

ましたが、Evaさんの家族と久しぶりに一緒に街を散歩していたら、5年前の自分に再会しているような、置いてきた魂に会っているような、そんな感じさえしました。

「ドイツ」との出会いは生き方や考え方が変わるほど大きなものでしたが、ドイツ滞在中のいろいろな人たちとの出会いとそこでの経験、そして帰国してから香川日独協会で出会った方々との出会いとさまざまな活動の経験は、全てドイツへの留学がきっかけでした。今では、それは何にも代えることのできない私の宝物だと思っています

遠い先の夢ですが、私は将来、ヴィースバーデンに日本のアンテナショップのような店をつくれたらいいなと思っています。留学時代、Evaさんが自宅で開いている日本語のレッスンでは、日本に興味を持つドイツの方たちにたくさんお目に掛かりました。そういった方たちによりよく日本を知っていただく場所がほしいと、留学時代から思っていました。特に茶道や書道は自分自身も小さい頃から興味を持ち続けているので、同じように少しでも興味を持つ方がいらっしゃるのあれば、是非お伝えしたいですし、茶道・書道以外でも、文化の交流はドイツと日本の相互理解にきっと役立つのではと思います。ただ、折角ならより正確に伝えたいという気持ちがあり、今も自分の時間の許す限りで稽古を続けているところです。いつか夢が叶いますように・・・。



私のドイツでの記憶

株式会社タダノ
開発部 キャリヤU
土井 一三
H16. 8. 30

はじめに

私は株式会社タダノに勤務する土井一三といいます。入社以来今年は34年目を過ごしております。入社以来設計部門に所属し、どちらかと言えば技術一本に近い存在で長い間、勤務してきました。

この様な私が1998年6月から2004年1月に帰国まで約5年半の期間をどのようにドイツで過ごしてきたか、それはどのように受け止めていたのか、帰国後半年が経過した、この時期に、振り返っておくことは自分自身にとって意義のあることと信じ、ドイツでの生活の記録として残すことにしました。

ドイツへのきっかけ

もちろん、(株)タダノでの勤務がなければ、海外での生活は全く無縁でした。1990年に(株)タダノはドイツにある「FAUN」社を買収した。タダノにとってはFAUN社のもつ特殊車両にかかわる車両技術が必要であったことが、最大の理由でした。(別添のFAUN GmbH社の資料を参照)

この買収を前に、私はFAUN社の精査のための調査メンバーの一人として選任されて、2回程FAUN社を訪問をし、技術者との面談をしました。面談はプロの通訳さんを介してのものでしたが、日本語で面談するのとは大違い。通訳さんにとっても、我々が使用する専門的な技術用語やFAUNの技術者の専門的なドイツ語の両方を互いの言葉に伝達ができず、面談中の中身はほとんどが互いの言葉を通訳さんに説明することに費やされたことを思い出す。そのような中であって、当時のFAUN社にはタダノの必要とする車両技術があると判断し、精査の結果として、技術部門からは、買収することの提案した経緯がありました。

その後、'98年の赴任までの間、業務の関連でFAUN社を訪問することがありましたが、正式の出向辞令をうけ、実際に6月に赴任。ドイツでの生活が始まることになりました。

本来なれば、家族同伴で赴任すべきですが、残念ながら事情により、ドイツへは単身での赴任となりました。それまで全く経験がないことだったため、何かと仕事以外のことも気がかりでした。次に5年半の単身生活での出来事で、印象に残る思い出をピックアップします。

FAUN社でのこと

- ・ 赴任直後のこと、現地スタッフの行動に驚きました。全員がこぶしで机をたたき、ドンドン、と全く予期してなかった私は、初日から何か失敗をしたのか？・・・

とあせってしまいました。後で教えられたが、これがドイツ流（FAUN社のみかも）の歓迎の表現だったとのこと。

- ・ 誕生日のお祝い：日本の習慣とは全く逆で当人が回りの人たちにお祝いをする。ケーキやクッキーをみんなに食べてもらうために当日持参してくる。その午前中は、職場内ではどこかざわめきあっている。よく考えてみれば、この方式が本当は正しいのではないかと今は思っております。「皆さん！！今日で私は？？歳になりました。お祝いしてください。これからもよろしくお願いします。」という感じに受け取れる。皆さんと一緒によりよい社会生活をしたいという気持ちのような気がする。
- ・ 何故、こんな記念日（？）ができたのか、由来を確認できていないが、女性が男性のネクタイをチョン切る日がある。毎年2月の冬の終わりを告げる各地でのカーニバルが始まるころだったと思う。会社でいきなりハサミでネクタイをチョッキンされた。切られた男性はその日はチョッキンと切られたままのネクタイを一日中している。見慣れない私には非常に滑稽でした。次年度からは、その日にはチョッキン用のネクタイをして出社した。

ドイツ語の勉強

- ・ エアランゲン大学の生徒で日本語の確かなサビーネさんという方に家庭教師をお願いした。彼女は一年間、東京へ留学し、きれいな標準語を勉強しており、私のしゃべる方言（讃岐弁）を聞いて、日本語が「ヘンですね」といいながら、ドイツ語勉強というより、彼女の日本語の勉強がはじまった。毎週1回の授業を約1年は続したが、ドイツ語はpsychologeと（心理学）ein bisschen（少しだけ）の正しい発音が出来ず、又男性、女性、中性、や1格・・・4格の変化を教わりつつ、自分の限界が見え始め、自然と諦めてしまった。
- ・ 会社の現地スタッフの紹介で、近くの町のスポーツクラブで卓球をやることを知り、クラブに入会した。最初の半年は毎週参加して適当な運動になっていた。言葉も出来ずに飛び込んだが、みんなからは快く受け入れてもらったことは非常にうれしい限りだった。点数をカウントするのがドイツ語。おかげで基本の数字の20まではなんとか早く、学べた気がした。beide（両方とも同じ）はこの時に早く覚えた言葉の一つだった。業務の都合で継続できなくなったのが残念だが仕方がなかった。やはりドイツ語を少しでも話せたら、もっと深いつながりもできたと思うが仕方がない。

交通ルールと社内のルール

私は5年半の間、マイカーを運転してきた。道路はどこにいても整備されており、どこへ行っても運転は楽であった。ご存知のとおりアウトバーンは行動半径を広げる。300kmの距離の出張は日帰りが可能で何回も経験した。

この中で見つけたドイツ人の交通ルールの違反に対する感覚がある。罰則が厳密であることは事前に聞かされていた。運転をしながら、ドイツ人のルールを守る姿勢には関心する。速度制限のあるアウトバーンでは確実にその制限速度まで減速するのである。通常の道路にても同様である。レーダーによるチェックで後日になって送付されてくる

違反金支払いがばかばかしいのか。又、現地スタッフとの食事のときも、車を運転する場合には、決してアルコールは口にしない。ルールを守ることがキチンと教育されその意味を理解しているのか。違反金の支払いがいやなのか？ 実際には、両方とも当たっていると思うが、いずれにしても結果的にはルールは守られているのである。ちなみに私は 駐在期間中に2件の反則キップをうけとった。いずれも速度オーバーで1件は50km制限を63km/hで13kmオーバーと2件目は30km制限を38km/hでの8kmのオーバー。当然のことながら私には全く記憶のないものスピード違反をした認識は全くなかったにもかかわらず、運転者の私の写真つきで郵送されてきた。反則金そのものは仕方ないが、このレベルでの支払いすることに違和感を感じた。

この交通ルールを守る姿勢で社内ルールも同様に守ることができれば、会社内で発生する不具合の再発は防止できるはずだ。と現地スタッフには何回となく要請したが、相変わらずであった。 出向期間を通じて、いろいろな出来事があった。その都度再発防止をはかるルールの見直しはすることはドイツ人スタッフは得意のようで、すぐに提案されるが、それを守ることが徹底できずにきた。社内ルールと交通ルールの違いを思い知らされた。やはり、違反金の重さだったのかも？

おわりに

ここに述べたものは、ドイツで経験してきたことのほんの一部にしかすぎません。ほかにもっと興味深いものがあったような感じもあります。

私は(株)タダノに勤務してきたことによって、誰でもが簡単には経験できない貴重な経験をさせて頂いた。又 今は無事に帰国し新たな業務についておりますが、この経験から得たものを生かさなければならぬと思います。

今はただ、現地FAUN社に出向中のタダノ社員、FAUN社の現地スタッフらの皆さんから協力頂いたことに感謝するのみです。

以上

添付資料：

FAUNの紹介：

FAUNとは **Fahrzeugfabriken Ansbach Und Nuernberg** からのつづりからそれぞれのアルファベット F.A.U.N.で「アンツバッハとニュールンベルグにある車両工場」という意味。設立は1845年にさかのぼることタダノよりも100年以上も歴史のある会社。現在はニュールンベルグの北東約20kmはなれたLauf(ラオフ)という市にあります。タダノからの出向者14名を含み全従業員約500名弱の会社です。オールテレーンクレーンの生産、販売が主体。タダノ向けとしてオールテレンキャリアの生産。又、タダノの輸出している北米向けのトラッククレーンキャリアを生産し、日本に輸出しております。

添付の写真は FAUN社の創立150周年の記念出版物から引用した、製品の一部を示しています。

Faun Fahrzeuge 1977-1997

FAUN All-Terrain Cranes RTF.

FAUN all-terrain cranes are off-road specialists which are also manoeuvrable and speedy on normal roads.

This is the point where FAUN proves all its experience in the field of vehicle construction. A chassis design which ensures an excellent tracking and steering stability and traction. It also manages a most difficult terrain and extreme slopes.

The hydropneumatic suspension and level control ensure a high driving comfort, even at a speed of 80 km p.h. on the road. Increasing the ground clearance, they facilitate the horizontal alignment of the crane in uneven terrain. The well-balanced weight-to-performance ratio and the optimum distribution of the axle loads permit the compliance with the specified axle loads, even when the crane is in full rig arrangement.

A specific technical brochure is available for each crane model. The data outline in the annex of this brochure will give you an initial, general information.

Grues FAUN tout-terrain.

Les grues tout-terrain FAUN sont à la fois spécialistes en tout terrain et usagers rapides dans la circulation.

Là se présente toute l'expérience de FAUN dans le domaine de la construction de véhicules. Une conception de châssis garantissant une tenue de route et de direction exceptionnelle, et une traction extraordinaire. Elle maîtrise aussi un terrain très difficile et des montées extrêmes.

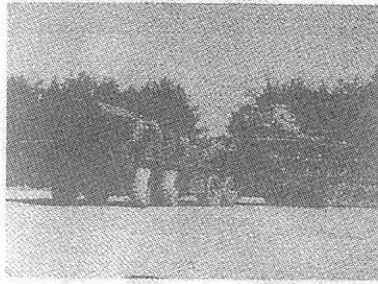
La suspension hydro-pneumatique et le nivelage permettent de garantir un bon confort de translation, même sur route à 80 km/h. En augmentant la garde au sol, elle facilite l'alignement horizontal de la grue en terrain accidenté. Le rapport bien équilibré poids/per-



In den neunziger Jahren präsentiert sich Faun Tadano als Spezialhersteller für schnellfahrende Mobilkrane. In zwei- bis sechssachsiger Ausführung mit Allrad-Lenkung und Motoren von 256 bis 384 PS werden die RTF-Modelle

(Rough-Terrain-Fast) gebaut. Hydropneumatische Federung und Niveauregelung sorgen für hohen Fahrkomfort selbst bei 80 km/h.

Schwerlasttransporter SLT 50-2 Elefant



Abmessungen:	Gesamtlänge/Gesamtbreite:	ca. 8.830/3.250 mm
	1000 über 1000 mm:	ca. 2.200 mm
	Radstand/Wendekreis Ø:	ca. 4.200/22.400 mm
Gewichte:	Leert-/Gesamtpescht:	ca. 25.100/42.000 kg
	Stütz-/Antriebs:	ca. 10.000/22.000 kg
	Vorder-/Hinterachse:	ca. 14.000/8.300 kg
	Gesamtpescht:	ca. 32.000 kg
Motor:	MTU 12V 337 (ca. 700) / Mercedes-Benz 220 AML (ca. 220 kW) bei 2200 min ⁻¹	
Getriebe:	12-Drehmomentgetriebe M 500-40 m, Vorderrad-Überbrückungsabstimmung, Hydraulische Lenkung 4 TW 220 HZ, 4-Viel- und 2-Rückwärtsgänge	
Achsen:	FAUN-Typ 12, Antriebs 8x8, 2x gelenkt - 2x star	
Radbau:	18 H - 22,5 x 205 mm P120, 60x1 - 1	
Fahrdaten:	mit Gesamtlast:	
	Geschwindigkeit 0-5 km/h, Steigung 30%, Zugkraft 300.000 N, Leistungsgewicht 1,5/1,4 km/h	
Aufbau:	Aufbaufrüherer	
Stützweite:	Hydraulisch, 2x 170.000 N Zugkraft	
Fahrgewicht:	Zweitüriges, geschweißtes Fahrgewicht in Gussstahlbauweise	
	Ölwanne 10 l für 4 Personen, optionaler Lager	
Stützweite:	Entsprechend den einstelligen 500, 500/215- und 71-Verschleiß, Fahrgewicht entspricht 11 A 001	
Lenkung:	Zweihandlenkung, 4-Viel- und 2-Rückwärtsgänge, Auslegung entspricht 120/20	
Kraftstoffanlage:	1 Kraftstoffbehälter 800 l	

Für den Straßen- und Geländetransport des Leopard 1-Panzers entwickelte Faun den Schwerlastzug SLT 50-2 »Elefant« mit Kässbohrer-Aufzieger. Die 8x8-Zugmaschine war mit einem 730 PS starken Diesel in Mittellage hinter dem Fahrerhaus ausgestattet. 324 dieser Elefanten mit dem markanten Stahl-Kunststoff-Fahrerhaus gingen ab 1977 an die Bundeswehr.



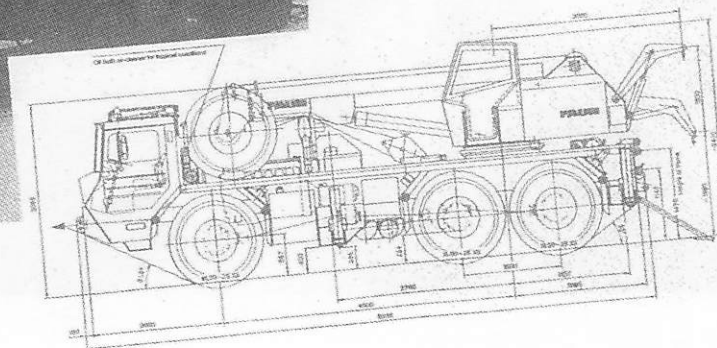
In den siebziger Jahren erhielten die Zugmaschinen eigene GFK- und MAN-Frontlenkerkabinen oder Fahrerhäuser von Magirus mit verschiedenen gestalteten GFK-Hauben für den Motor. Auf Ölfeldern in Nordafrika und – unter anderem – beim Militär im Nahen Osten fanden die Haubenzugmaschinen in Tropenausführung Verwendung. Die HZ 32.25/40 6x4 als Sattelzugmaschine war mit einem 275-PS-Diesel, die spätere HZ 46.40/49 8x8 mit einem 455-PS-Diesel ausgestattet.

79

Faun Fahrzeuge 1977-1997



Für die NATO entwickelte Faun 1987 den dreifach-sigen Bergungskran BKF 20.31/46 6x6. Das Fahrzeug besaß die in Verbundbauweise erstellte Low-Line-Kabine, einen Zehnzylinder-320-PS-Diesel und Planetenachsen.



88

TV番組制作現場的一幕

菓子工房ルーヴ 野崎 幸三

「それで感動が伝わるの?」「君は何年やってんの。アマ（アマチュア）じゃないんだから!」などなど文章では表せない罵声が飛ぶ。

ここはテレビ東京系列人気番組『TVチャンピオン ケーキ職人選手権』の制作のロケ現場である。

プロデューサー氏・ディレクター氏とADと呼ばれるアシスタントなどが交わす言葉は、まさにプロとプロの戦いの場である。

選手たちはケーキで巨大なアートを造ったり、創作菓子を作ったり、普段のお菓子屋さんの仕事の延長線上にあるような、ないような技術とアイデアを絞り、10時間の制限時間の中で、その造形力と審査員諸氏の舌を魅了する味の勝負。

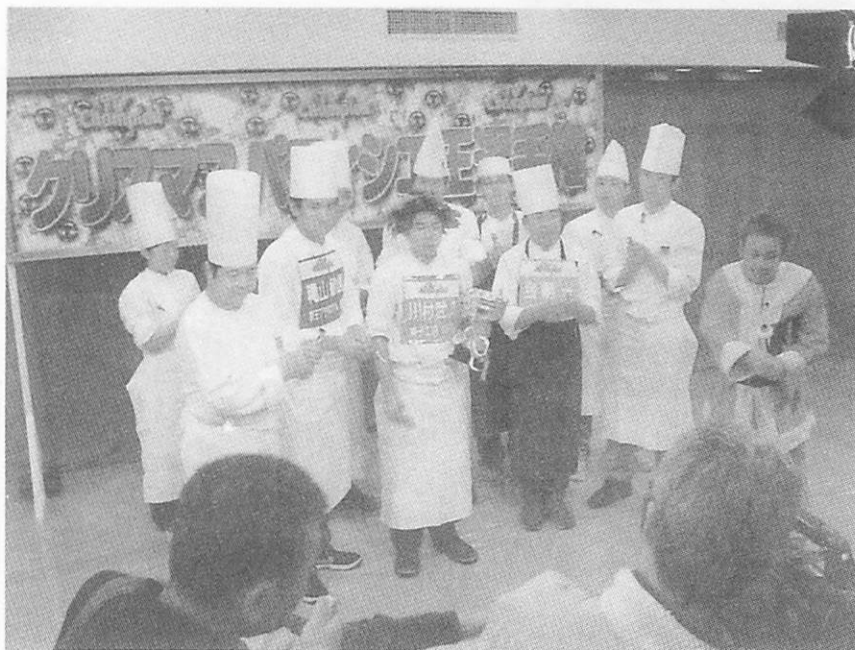
全国から選ばれた敏腕職人がその技を競うのである。

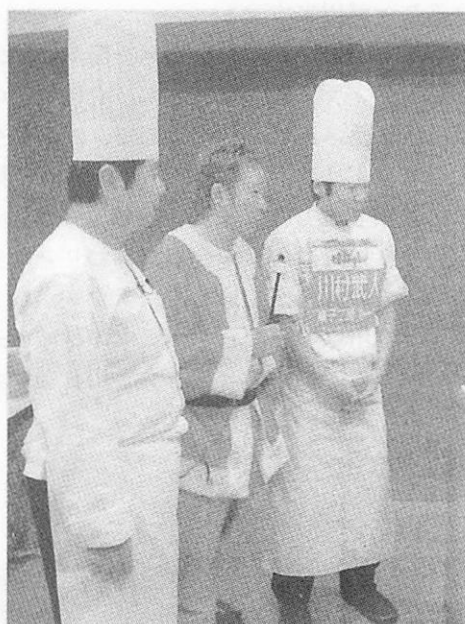
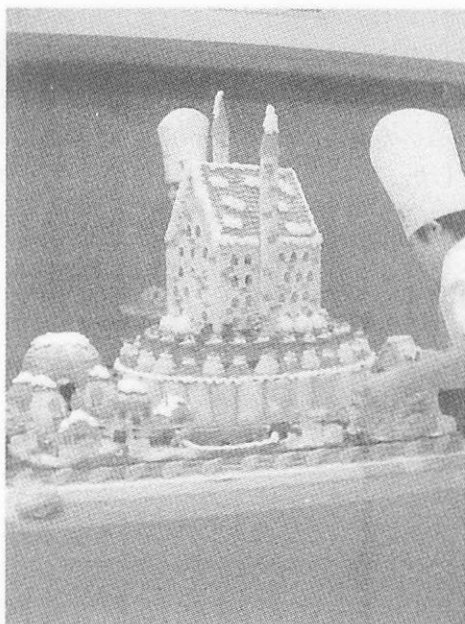
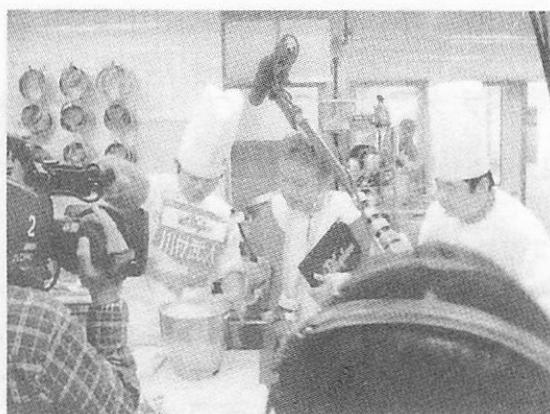
その現場を撮るスタッフにとっても、プロとプロのヤラセなしのその瞬を映像に残していく作業をするわけだから、きつくなる訳である。

その厳しい戦いの中で、我が菓子工房ルーヴ チーフパティシエ率いる「TVチャンピオンチーム」は見事2連覇の偉業を達成しました。

振り返って私は、そのTV番組制作現場の瞬を大切にスタッフから学ぶべきものは多くあり、その番組をご覧になった視聴者の目に映るものが、何を連想し思い抱くのかよく考え、私共菓子工房ルーヴの今後の期待される商品作り・店作りに注力しなければならない。

ご声援ありがとうございました。





第11回香川チター音楽祭

中井 護 (コンサート委員長)

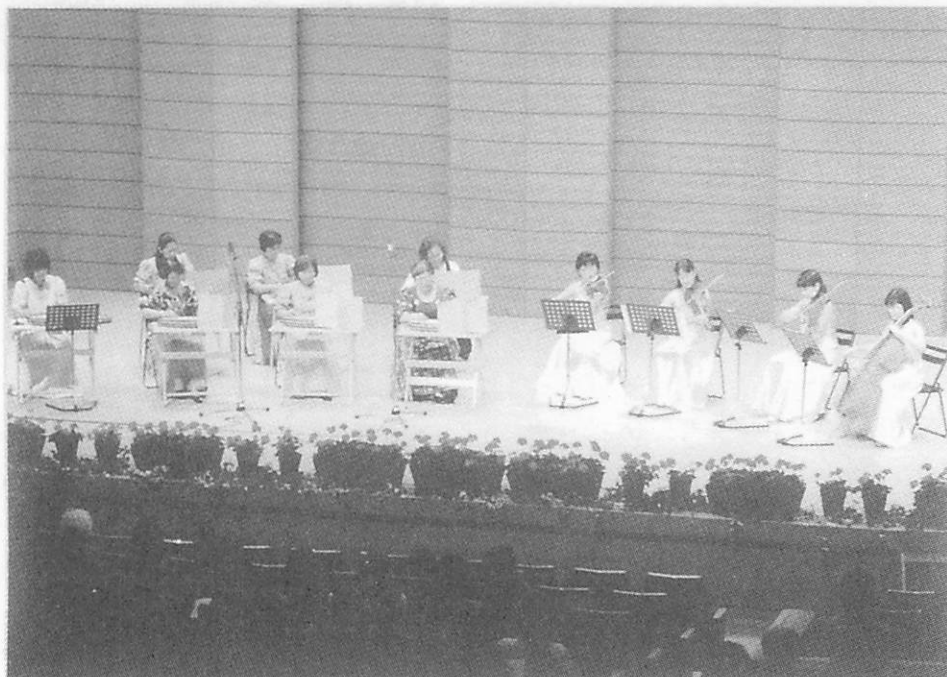
香川日独協会のご後援をいただきました第11回香川チター音楽祭が9月21日(日)午後2時から、高松テルサホールで行われました。

映画「第3の男」がヒットし、音楽を担当したアントン・カラスのチターに魅せられ、多くのチターファンが誕生したのは、もう50年前のことです。しかし、チターは滅び行く民族楽器、難しい演奏、演奏できる者は殆どいない、というのが20年位前まで日本の定説でした。

1991年内藤敏子先生が高松でチター教室を開き、1993年には第1回のチター音楽祭が開催され、ゲストとしてドイツからチタートリオが来演、内藤チターアカデミー高松校の生徒約30人が演奏した時の驚きは、今もって忘れることが出来ません。

今回の音楽祭は、第11回という新たな出発を記念し、地元香川のフォークダンスグループ「舞夢」を招き、さらに世界的に活躍のソプラノ岩崎京子さん、女性4人の弦楽カルテット・アルバートロスがゲスト出演しました。現在高松校は5クラスあり、前半1部で、内藤先生が「心への道」、「乙女の祈り」の2曲をソロ演奏、4クラスが「美しき青きドナウ」「ロマンス」などを演奏しました。後半2部では、最古参のクラスが「花束」をアルバートロスと共演しました。また、岩崎京子さんの素晴らしいソプラノ、「舞夢」のダンスがあり、最後は観客の皆様も加わり「野ばら」の合唱で終わりとなりました。

私たち高松校一同は、この音楽祭を通して、チターが醸し出すアルプスの香りと音色を、香川県のみならず西日本の地域へ送り届けることができることを願っています。今後とも香川日独協会の会員の皆様のご支援をよろしくお願い致します。



ごあいさつ



再会を祝って、ドイツ国際平和村広報部長の
ヴォルフガング・メーテンス氏と固い握手をかわす

香川県高松市春日町1627-1
株式会社 ビッグ・エス

大坂 靖彦

今年も全国ドイツ語スピーチコンテストの成績優秀者と、年間優秀社員賞を獲得した社員2名および年間最優秀賞を獲得した社員夫妻とともに、当社が毎年行っているドイツ国際平和村への募金、ワインの買い付け、そしてドイツの文化に触れるために、ドイツへ行ってきました。

ドイツ語スピーチコンテストは昨年度が第4回目でしたが、年々のレベルの向上に加えて、エンターテインメント性も増えており、ドイツ語がわからない人でも楽しめるようになってきたと思います。そのコンテストの成績優秀者や社員とワイン農家を訪れましたが、近隣の農家の人も参加しての歓迎大パーティが催され、大変楽しい夜を過ごすことができました。

その後、ケルンを見学し、デュッセルドルフの記念式典(ヤープンターク)に参加。また、松村先生のミュンヘン市民講座にも参加することができました。ドイツ人と日本人の合計30人ほどが集まり、自己紹介の後、当日のテーマに対しての日独入り混じっての説明や質疑があり、和気藹々としてまさに日独同盟さもあるというような楽しさでした。

そして最終目的地のオーバーハウゼンへ行き、平和村へ第3回目の100万円の募金贈呈式を行ってきました。日本からの寄付は単発的なものが殆どで、私どものように企業として毎年寄付を続けているというのは珍しく、今年も大変喜ばれました。今回は初めて子供たちとの昼食会に参加しましたが、楽しく、またおいしくて御代わりをしたほどです。子供たちにとってだけでなく私たちにとっても毎年のこの平和村訪問がたいへんうれしいものとなっています。

僭越ながら、ドイツ訪問時の写真や平和村での内容、そして今年度第5回目開催のドイツ語スピーチコンテストの募集要項を添付させていただきましたので、ごらんいただければ幸いです。このスピーチコンテストはまだまだ何年も続けて行きたいと思いますので、会員の皆様やお知り合いの方にもぜひ出場していただければこれほどうれしいことはありません。



ワインと平和村の子供たち

丸亀パワフル館 西川 晃司
本社 元木 公美子

今年の6月に、私たちは第4回ドイツ語スピーチコンテストの最優秀賞者2名(1名は別スケジュールでドイツへ)と一緒に、「ドイツワインの樹」会員様のワインの出来具合調査、そしてドイツ国際平和村へ弊社で集められた募金を贈呈する目的でドイツへ行ってきました。弾む気持ちを抑えられないまま11時間のフライトを終え、フランクフルト空港に降り立ちました。

今回の目的は6月に、弊社家電販売の店舗「丸亀パワフル館」に酒売り場を設置する準備と、ワイン通販のホームページ責任者としてのワイン農家とのコミュニケーション作り、そしてオーバーハウゼンにあるドイツ国際平和村へ今回で3回目になる100万円の募金贈呈に行き、当社が推進しているフィランソロピイ活動を実際に体験して頂くことです。

緊張のあまり、思わず「HELLO!!」 英語の挨拶に赤面

空港に到着した私たちを迎えてくれたのはワイン農家のマンツ家のご主人と、バルツホイザー一家のペーターさん。飛行機内でドイツ語の挨拶を何度も練習していましたが、初めて会うドイツの方に緊張してしまい思わず「Hello!」と英語での挨拶をしてしまい赤面してしまいました。



始まりました。

作物が育つ畑は、どこまでも続くかのような緑の絨毯を思わせ、可愛らしく佇む家々は、私の大

ワイン農家へ到着後、まずガタゴト揺れるユニークな車に乗り、ライン河を眼下に見下ろすことのできる丘陵へ移動。車の中では早速ワインパーティが



好きな映画の世界を作り出しており、何もかも新鮮で、瞬きする瞬間ももったいないぐらいでした。



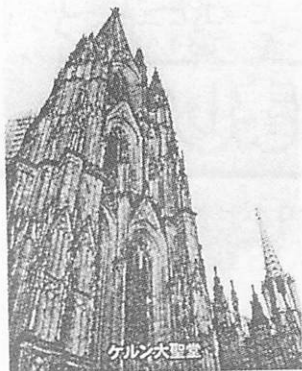
2日目は昼間にハイデルベルグ城へ。中世の雰囲気漂う町並みと、バロック、ルネッサンスなどの様々な建築様式が取り入れられている建物に魅了され、ヨーロッパの歴史を感じる事ができました。お城から見える景色は赤屋根の美しい風景が眼下に広がり、日本では味わえない雰囲気です。



一口のヴィンテージ・ワインに 歴史の重みを感じて

その夜のパーティには、ラインヘッセン地方のワインクイーンも出席し大感激。おいしいワインと食事、また農家の方々の笑顔がお腹と心を満たしてくれました。あつという間のパーティの最後に、ペーターさんがとっておきの50年もののワインを振舞ってくれました。一口飲んだ感想は50年間熟成された濃厚な味。こんなに古いワインでここまでおいしく飲めるワインはあまりないと、一同感激も味わいました。





ケルン大聖堂



大聖堂の頂上まで

3日目はいったんワイン農家の方たちと別れ、鉄道でケルンの大聖堂へ向かいました。地上200mに到るための非常に狭い階段には悲鳴をあげながらも、登りきりました。小さなことでも何かを達成する時は気分爽快です。ここで撮った写真はきつといい笑顔で写っているはずですが、どうでしょう？ただし、その夜は両足がつつてしまい苦しくて痛くてなかなか眠れない夜となりました。

平和村の子供たちに勇気を貰って、 フィランソロピ活動に改めて使命感

4日目はこの1年間に集まった募金、100万円を贈呈するため、オーバーハウゼンにあるドイツ国際平和村へ行きました。



再びワイン農家の方たちと現地で落ち合い、一緒に施設内を担当の方に案内していただきました。最近、日本でもテレビや雑誌で取り上げられる事が多くなりましたが、日本からの募金が一番多いとのこと。



日本人ボランティアが意外に多いことにも驚きましたが、訪問した当日も日本人スタッフが5~6名おり、子供たちと一緒に生活をしていました。それ以上に驚いたのは、子供たちの明るさです。訪れる前は、どんな顔をして施設内に入ればいいのかと不安に感じていたのに、そんな心配は無用とばかりに、とても自然に笑いかけてくれました。子供たちのおかげで、緊張は一気にほぐれ、一緒にいただいた食事とてもおいしく感じました。

ここにいる子供たちと、その子供たちの為にいろんな国から参加しているボランティアの人々に実際にお会いして、いま私たちが会社で取組んでいる募金活動を継続できるよう、日本に帰ってスタッフや、お客様に伝えていく事が、会社の社員代表で贈呈式に参加させていただいた私達の使命だと改めて痛感しました。

今後、永続的にこの活



ドイツ国際平和村のごもたちと

動ができるようにしっかりと働き、会社の仲間が一人でも多くこの貴重な経験ができるよう積極的にフィランソロピ活動に努めていきたいと思ひます。

人としての至情の交わりや思いやりに 国境を越えた人類愛を感じる

この日、現地で落ち合ったワイン農家の3人とともに「軽く夕食でも」と立ち寄った街モーゼルで、ワイン祭りが開かれていました。私たちもワインを飲み、賑やかなオーケストラをバックミュージックに、石畳の大きな広場にパラソルを立て、街中いたるところで乾杯しました。こういった人類としての至情の交わりや相手を思いやる気持ちが、先ほど訪れた平和村の本質ではないかとふとそう思いました。



モーゼルのワイン祭りで気さくに乾杯

最後の1日は地下鉄に乗ってフランクフルトの街へ行き、恐竜博物館やゲーテハウスを見学しました。嬉しかったのは大学の近くで地図を広げて場所を探していると、学生さんに「May I Help You?」と声をかけてもらったことです。外国人だとなるべく避けて通りそうなものなのに、これが世界では当たり前なののでしょうか？脱帽です。ドイツ最後の夕食はガイドブックに紹介されている有名な料理屋さんに行き、名物のりんご酒と、おいしいドイツ料理で締めくくりました。

今回のドイツの旅はワイン農家の人々に大変よくしていただきました。ある時ベルナーさんに、「なぜそんなに親切にしてくれるのですか?」と質問したら、ベルナーさんは、「日本に行ったときにビッグ・エスの人たちが本当の家族のように接してくれて、非常によくしてくれたから、同じ様にもてなしをしたいと思っている」と答えてくれました。その暖かい言葉が今でも心に残っています。今後私たちも感謝の気持ちを忘れず、私たちの所へ訪問してくださる方々を、笑顔で迎えたいと思ひます。また、旅先で出会った人々や、目にしたもの、また体験し感じたことをこれからの生活に生かし、より一層幅の広い奥深い仕事をしていきたいと思ひます。



今回で3回目 お客様からお預かりした募金を ドイツ国際平和村へ贈呈してきました。

株式会社ビッグ・エスの各店舗でお客様からお預りした募金100万円をお渡しするために、2004年6月4日(金)にドイツ国際平和村を訪問し現地で贈呈式を行いました。(今回が第3回目)

連絡先

株式会社 **ビッグ・エス**

石水 一之

TEL:087-843-7738

FAX:087-843-7761

E-mail:info@big-s.jp <http://www.big-s.co.jp>

株式会社 ビッグ・エス(代表取締役 大坂 靖彦、本社:香川県高松市)は、このほどドイツのオーバーハウゼンにある国際平和村を訪問し、第3回目の贈呈式を行ってきました。これは、ビッグ・エス各店舗・教室(家電専門店『ケースデンキ』、パソコン専門店『ピーシーデポ』、酒・米・88円ショップ『ビッグ・エス』、パソコン教室『楽²パソコン教室』)にご来店されるお客様からお預かりした善意の募金100万円をお渡しするため、今回で募金総額が300万円になりました。この募金の内訳は、店舗・教室に設置された募金箱の回収金額はもとより、当社の売上金の一部、お取引様のご支援、当社従業員の協力、会員制の『ドイツワインの樹』にお申し込み頂いた会費による収益の一部も含まれています。

ドイツ国際平和村は、ボランティアにより運営され、世界各国で続けられる戦争や紛争の煽りを受け、不幸にも大きな負傷をしてしまった14歳以下の子供たちをアフガニスタンやアンゴラを初め数十カ国から集め治療を施しています。当社はこの村の運営のご趣旨に賛同し、2001年より全社を挙げ店内に告知のポスターや募金箱を設置し、募金活動を積極的に推進しています。オーバーハウゼン国際平和村における第1回贈呈式(2001年)の様子は、TBS系の「世界ウルルン滞在記」を初めマスコミ各社様にも取り上げて頂き、大きな反響がありました。

今回の贈呈式に参加したのは、当社代表取締役の大坂靖彦夫婦、同行した電器店舗の店長および本社女性スタッフと年間最優秀社員賞を受賞し世界一周旅行の途中にドイツに立ち寄った社員夫婦、そしてビッグ・エスが主催している全国ドイツ語スピーチコンテストでの最優秀者1名、そしてビッグ・エスが現地で直接仕入れをしているドイツのワイン農家3家の代表者3名の計10名です。

平和村の責任者や子供たちに募金を贈呈した後は、子供たちと同じ食事をとりながら歓談し交流を深めました。その席上、平和村広報担当のヴォルフガング・メーテンス氏からは、平和村への寄付金は単発的なものが多く、このように毎年継続して贈呈されるということは少ないため、驚きである一方、非常に感謝している旨の話がありました。

メーテンス氏の謝辞に対し、代表取締役の大坂は、「ハンディキャップのあるにもかかわらず、子供たちの屈託のない笑顔が心を和ませてくれます。平和村の子供たちに囲まれて、改めて平和の尊さを実感し、来年もこの募金活動を継続しなくてはと心に決めた次第です。」と述べました。

なお、ビッグ・エスの社会貢献活動としては、ドイツ国際平和村への募金活動以外にも、日本ユニセフ協会に対し、店舗におけるパソコン売上の一部を寄付しており、その額は年間100万円近くになります。

お客様ならびにお取引様からのご理解・ご協力に感謝申し上げますとともに、今後も積極的に推進していきたいと考えています。

皆様のご支援とご協力をお願いいたします。

ケースデンキ **ビッグ・エス**は
ドイツ国際平和村を応援します。

子ども達に言ってほしい…
『生まれてきて良かった』と。
戦災で負傷した子供たちを、私たちは全力で支援します。

ビッグ・エス、ケースデンキでは来店されるお客様につき銭の中から「1円」、募金箱への投入をお願いしています。皆様にとって「わずか1円」「たった1円」でも、私たちのお店に訪れる年間140万人のお客様の7割の方がご協力いただきますと、100万円になります。そのお金で、被災を受けた自分の国では生き残れない状態の子ども達を治療し、リハビリしているドイツのオーバーハウゼン国際平和村を支援できます。この国際平和村は、アフガニスタンやアンゴラなど、数10カ国から集まった被災児童を治療しているボランティア活動組織です。私たちは小さな企業ですが、この大きな取り組みに全力をあげます。社員やその家族はもちろん、関連企業やお取引先様にもお願いしております。2000年よりこの募金をスタートし、お客様からご協力頂きました募金と併せて当社の利益の一部を毎年秋頃に現地に贈呈式を行います。たとえ結果的に不自由な身体になったとしても、子ども達に『生まれてきて良かった』と言ってほしいのです。皆様の温かいご理解とご支援をお願い申し上げます。

(株) ビッグ・エス
社員一同



引き続き、
皆様のご支援と
ご協力をお願いいたします。

●ドイツ国際平和村と募金活動につきましては、
弊社のホームページをご覧ください。
<http://www.big-s.co.jp>

下記口座にて郵便振込でも受け付けております。

口座番号 01640-3-23611 口座名称 ビッグ・エスドイツ国際平和村募金口座

当社ホームページに、募金額を掲載しております。(随時更新)
(<http://www.big-s.co.jp>)

▲株式会社ビッグ・エスが全社をあげて取り組んでいる
「ドイツ国際平和村」支援活動へのご協力をお願いする
しおり。本社はもとより、ケースデンキ、PC DEPOT、
ビッグ・エス、ラクラクパソコン教室でおいでいただく方々に
お渡ししています。

▼贈呈先のフリーデンスドルフ ドイツ国際平和村より
頂いた100万円(7,290ユーロ：寄贈当時の為替レ
ート)の受領証明書。

FRIEDENSDORF[®] INTERNATIONAL Postfach 140162 • 40131 Oberhausen • Lantenstraße 21 • 46539 Dinslaken Telefon (0 20 64) 4974-0 • Telefax (0 20 64) 4974-999 • e-mail: info@friedensdorf.de	
Big-s Kasugacho 1627-1 Takamatsu Kagawaken Japan	21. Mai 2004 Ausgestellt: B. Müller / M. Staudt Altverleihen: Durchwahl: (0 20 64) 42 74- Homepage: http://www.friedensdorf.de Mitglied im: Deutschen Paritätischen Wohlfahrtsverband OZG Spenden-Siegel: Zeichen für Vertrauen
GELDZUWENDUNG (Spende) Sehr geehrte Damen und Herren, wir bestätigen den Eingang Ihrer Zuwendung (Spende) vom 19.05.2004 in Höhe von -EURO 7290,00-Siebttausendzweihundertneunzig Es handelt sich nicht um den Verzicht auf Erstattung von Aufwendungen. FRIEDENSDORF INTERNATIONAL <i>B. Müller</i> Bottina Müller (Dieses Schreiben gilt in Zusammenhang mit den untenstehenden Informationen zur Vorlage bei Ihrem Finanzamt als Bestätigung über Zuwendungen im Sinne des § 10 b des Einkommensteuergesetzes an eine der in § 5 Abs. 1 Nr. 2 des Körperschaftsteuergesetzes bezeichneten Körperschaften, Personenvereinigungen oder Vermögensmassen.) Hinweis: Wer vorsätzlich oder grob fahrlässig eine unrichtige Zuwendungsbestätigung erstellt oder wer vorsätzlich diese Zuwendungen nicht zu den in der Zuwendungsbestätigung angegebenen steuerbegünstigten Zwecken verwendet, handelt für die Steuer, die dem Fiskus durch einen etwaigen Abzug der Zuwendung beim Zuwendenden entsteht (§ 10b Abs. 4 EStG, § 9 Abs. 3 KStG, § 9 Nr. 5 GewStG). Diese Bestätigung wird nicht zur Haftung für die steuerliche Berücksichtigung der Zuwendung anlässlich des Zinsens des Fiskus gleichwohl länger als 5 Jahre bzw. das Datum der vollständigen Bezeichnung länger als 3 Jahre seit Ausstellung der Bestätigung zurückgegriffen (BMF vom 15.12.1994 -35331/S. 304). Es wird bestätigt, dass die Zuwendung nur zur Förderung möglicher Zwecke (§ 5 der Anlage 1 zu § 48 Abs. 2 Einkommensteuereinführungsvorordnung -Abschnitt A Nr. 7) verwendet wird. Dem Bank giro vom 15.05.2004 des Finanzamtes Oberhausen, Günterturm 111-170/2106, Nr. des Jalousie Friedensdorf e.V. nach § 5 Abs. 1 Nr. 8 KStG von der Körperschaftsteuer befreit, nach § 2 Nr. 3 GewStG von der Gewerbesteuer befreit und verbleibt möglichenfalls. Wir bestätigen, daß die von uns empfangenen Beträge nur für steuerbegünstigte Zwecke verwendet werden und daß die von uns empfangenen Beträge ausschließlich zum Wohlfahrtszweck verwendet werden. Kontakt: Friedensdorf Oberhausen, Stadtparkstraße 102 410 (021 955 500 00) • Stadtpark Dinslaken-Vorste-Hörne 111153 (021 955 510 00) Vollbank Rhein-Ruhr AG 4802210000 (021 955 600 00)	



◀ドイツ国際平和村のこどもたちや広報部長のヴォルフガング氏、そして同行したドイツワイナリのマンツ、バルツホイザー両氏とフレームに収まるビッグ・エススタッフ
(2004.6.4 ドイツ国際平和村にて撮影)

会 員 制

ドイツワインの樹

Ein deutscher Weinstock

あなただけのドイツワインの樹のオーナーになりませんか?

Möchten Sie nicht Besitzer eines eigenen Weinstocks in Deutschland werden?

収穫後、あなたの樹のブドウで造った白ワインをお届けします。

Wir liefern Ihnen nach der Ernte den Weißwein Ihres eigenen Weinstocks.

年会費

1口10,000円 税込

Die jährliche Mitgliedsbeitrag beträgt 10,000 Yen pro Einheits (incl. Steuern)



ペーター・バルツホイザー
Peter Balzhäuser



ベルナ・マンツ
Werner Manz



カール・ペーター・フーフ
Karl-Peter Hult

ドイツワイン 3人の作り手たち!!

Die drei deutschen Winzer

次々金賞ワインを生み出す、まさにドイツワインのマイスター。きらめく3家の人達! その歴史の中で代々受け継がれたワイン造りの技をこ期待ください!!



2003/2004 ラインヘッセンワインの女王
エヴァ・フォルマーさん

ドイツ有数のワイン産地ラインヘッセン地方のワイン農家3家(マンツ家、フーフ家、バルツホイザー家)のぶどうの樹3本分のオーナーを毎年限定で募集しています。樹の成長と収穫を楽しみ、自分だけのワインを味わってみませんか? ドイツはワインを造る国の中で最も北の北緯50度圏に位置する国でライン川に沿って産地が集中しています。その中でもラインヘッセンは、現在ドイツ最大の栽培面積を持ちます。土壌と気候が多様なため、品種はシルヴァーナ、リースリングなどバラエティーに富んださまざまなワインが造られています。ここは温暖な気候で地形の傾斜が平らな為に「柔らかな果実風味でまろやかな口当たり」が特徴で、誰が飲んでも抵抗のない安定したワインを産出します。会員様に香り高い美味しいワインをお届けしようということで、この企画が始まりました。

Jeder Person können jeweils einen Weinstock von drei verschiedenen Weinböden in der Rheinhessen, einem bekannten Weinanbaugebiet Deutschlands, erwerben. Sie haben die Freude, das Heranwachsen des Weinstocks und der Ernte mitzuerleben und können dann ihren eigenen Wein genießen. Der Weißwein von Rheinhessen ist dank des milden Klimas der Gegend für seinen vollen Geschmack bekannt. Wir haben diese Kampagne gestartet, um Ihnen diesen Wein näherzubringen.

美味しいワインのお届けは翌年11月~12月の予定

※到着予定につきましては、天候により遅れる場合がございます。

お申込開始

Anmeldung

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

ドイツ出航

Nach Japan

auslaufen

お届け時期

schickenzeitpunkt

品評会

von Rheinlandpfalz

verliehen bekommen

お届け後の流れ

Wie es nach der Anmeldung weitergeht.

お申込み締切り

Anmeldeschluss

お便り vol.1

お便り vol.2

お便り vol.3

お便り vol.4

お便り vol.5

お便り vol.6

お便り vol.7

お便り vol.8

お便り vol.9

お便り vol.10

お便り vol.11

お便り vol.12

お便り vol.13

お便り vol.14

お便り vol.15

お便り vol.16

お便り vol.17

お便り vol.18

お便り vol.19

お便り vol.20

FRIEDENSDORF INTERNATIONAL

株式会社ビッグエスでは、この「ドイツワインの樹」の収益の一部を、オーバーハウゼンドイツ国際平和村に寄付いたします。Die Big-S AG spendet einen Teil des Gewinns des International Friedensdorf in Oberhausen. (詳しくは弊社ホームページをご覧ください。)

※平成13年12月28日「世界ウルルン滞在記」にて紹介されました。

ホームページアドレス <http://www.big-s.co.jp>

お申込み方法

お申込み方法などの詳細は裏面をご覧ください。

うれしいお申し込み特典もあります。

Die Einzelheiten der Anmeldung finden Sie auf der Rückseite.

お申込みは20才未満の方はできません。○お酒は20歳になってから。未成年の飲酒は法律で禁止されています。



ドイツ連邦共和国
DEUTSCHLAND

- アルスハイム Alshelm (バルツホイザー家) Fam. Balzhäuser
- ウンデンハイム Undenheim (マンツ家) Fam. Manz
- ニアシュタイン Nierstein (フーフ家) Fam. Hult

ビッグエス
THE LIQUOR SUPERSTORE

ドイツワインの樹

お申込み特典

シュペートレーゼワインを1本プレゼント
(お申込時にその場でプレゼント)

※1口につき1本、3口以上お申込みでさらにプラス1本プレゼント。
(例:6口お申込みで7本プレゼント)

Zur Anmeldung erhalten Sie als Geschenk eine Flasche Spätlese.

ワインの樹 継続 プレミアム特典

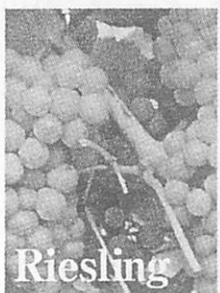
前回の会員様で第2回目も継続お申し込みいただくと、お申し込み特典ワインを

さらにもう1本プレゼント!

オリジナルのインシュペートレーゼ

オリーブオイル

ぶどうは白ぶどう、最高級品種リースリング
上品な酸と甘さのバランスが絶妙。



Riesling

オリジナルワインの樹について

樹のオーナー1年間のお楽しみ
はじめにオーナーの会員証をお送りします。
3軒のワイナリーからの情報をもとに今年の天候や畑の様子、ぶどうの出来具合、
ファミリーの様子など写真を交えてE-mailもしくはお便りいたします。
Wir schicken Ihnen zuerst die Mitgliedskarte.
Wir teilen Ihnen per Postkarte oder E-mail mit, wie das Wetter ist und wie der
Wachstum der Weinstöcke verläuft.
お楽しみ オリジナルワインについて
3軒のワイナリーで今年育つリースリング種のぶどう果粒を醸してワインを造っ
ていきます。ワインは農産物ですから、なにより天候次第!!品質特級、収穫量と
も10月中旬の収穫までわかりません。
Die Wetterverhältnisse versprechen einen qualitativ hochwertigen Wein.
お届けするワイン
平年でお届けするワインの本数は(3本の樹から)5-8本でリースリング種の
白ワインです。収穫後、発酵、熟成、瓶詰めを経て、みなさまにオリジナルワイン
をお届けする時期は翌年11月-12月の予定です。どうぞご期待ください。
In der Regel kann man mit drei Weinstöcken vier bis fünf Flaschen
Wein gewinnen. Wir schicken Ihnen den fertigen Wein
dann im Frühsommer 2004. Sie können sich schon darauf freuen.

今までの「ドイツワインの樹」 お届けワイン実績

ベーター・バルツホイザー リースリングシュペートレーゼ	2本
ベルナ・マンツ リースリングアウスレーゼ	2本
カールベーター・フーフ リースリングアウスレーゼ	2本
合計6本お届け	

会員の皆様のワイン		
10月	11月	12月
ドイツ ワイン	日本 酒	お 酒 け

生産者の構成と品質分類

Qualitätswein mit Prädikat (Qmp)
クオリター・プリアディカート プレディカート
ドイツワインの中の最上級クラス
「肩書き付き高級ワイン」
今まで「ドイツワインの樹」でお届け
したワインはすべてこのクラスです。
Qualitätswein bestimmter
Anbaugebiete (QbA)
クオリター・ブエイン ベシュテマ・アンバウゲビート
ドイツの国内基準をクリアした生産地指定上級
ワイン、日本で一番多く売られています。
Landwein ラントワイン
指定産地付きテーブルワインです。
Deutscher Tafelwein
ドイツ・タフェルワイン
ドイツのテーブルワインです。

お申込み期限 Anmeldechluss

毎年9月30日

口数に限りがあります。
満口になり次第締め切らせていただきます。
お早めにお申込みください。

年会費

1口税込10,000円

Der jährliche Mitgliedsbeitrag beträgt
10,000 Yen pro Einheits (incl. Steuern)

お申込み・お支払い方法 お申込、お支払い方法は下記の中からお選びいただけます。

お申込み方法

- 店頭にて
受付
- FAXにて
受付
- メールにて
受付
- ホームページ
e-shop 087-843-7711
にて受付

お支払い方法

- Bezahlung:
Bar in einer der Filialen, per Postüberweisung oder
mit Kreditkarte (vonder Rakuten-Homepage aus).
- 店頭にて現金払い
または
●郵便振替
- 入金確認後
会員証発行
- クレジットカード払い
- 承認確認後
会員証発行

入会

お申込み先

株式会社 ビッグ・エス 各店舗
●お申込みFAX 087-870-0355
http://www.big-s.co.jp
●ホームページアドレス shop@big-s.jp
●e-shop BIG-S (楽天市場) http://www.rakuten.co.jp/big-s/

郵便振替先
口座番号 01630-3-56911
口座名称 株式会社 ビッグ・エス

Die Anmeldung kann telefonisch, per Fax, per E-mail oder direkt von der
Homepage von Big-S aus erfolgen. Sie können auch persönlich zu Anmeldung
in eine unserer Filialen kommen und dort direkt bezahlen.

こんなお便りが届きます。



- ◇お申込みいただいた翌年のキャンペーン・お祝いはさせていただきます。
- ◇出来上がるワインはその年の天候により品質などが異なる場合がありますので、ご了承ください。
- ◇楽天市場で代金引当でお申し込みいただけます。
- ◇天候によりワインが出来ない場合は増設オリジナルワインを5-8本お送りいたします。
- ◇ワインお届け時に、会員様の更新確認をいたします。
- ◇会員証は入会・承認確認後、3-4週間以内に発送いたします。未届の場合は下記お問い合わせ先まで、ご連絡ください。

- Hinweis:
◇ Eine Stornierung nach der Anmeldung ist nicht möglich.
◇ Bitte beachten Sie, dass die Qualität des Weins je nach den Wetterverhältnissen schwanken kann.
◇ Die Anzahl der Weinstöcke begrenzt ist, ist eine zeitliche Anmeldung ratsam.

お問い合わせ先 株式会社 ビッグ・エス 「ドイツワインの樹」係 香川県高松市春日町1627-1 TEL (087) 843-7711

お申込みは20才未満の方はご遠慮ください。●お酒は20歳になってから。未成年の飲酒は法律で禁止されています。

ドイツワインの樹のオーナー お申込み書

フリガナ
お名前
Name

フリガナ
会社名
Name der Firma

お申し込み
口数
Anmeldungs
Einheit

フリガナ
ご住所
Adresse

お電話番号 ()
Telefonnummer

フリガナ
お届け先名称
Liefername

フリガナ
お届け先住所
Lieferadresse

お支払い方法 bezahlen ☐ 現金 bar ☐ 郵便振替 überweisung

お申し込み先
E-mail
アドレス

お持ちの方は必ず正確に記入してください。お便りメールをお送りします。ご記入いただけない場合は
特別なメールにてのお便り及び運送販売でのお便り提供をお断りできません。ご了承ください。

アンケート ✓を入れて下さい。

(1) ワインの樹よりできたお届けワインは下記のどのタイプがよろしいですか?
☐ 甘口のみ ☐ 辛口のみ ☐ 甘辛半分ずつ

(2) お申し込み及び継続特典のワインは下記のどのタイプがよろしいですか?
初めての会員様はどちら ☐ 甘口のみ ☐ 辛口のみ
継続の会員様はどちら ☐ 甘口のみ ☐ 辛口のみ ☐ 甘辛半分ずつ

(3) お申し込み及び継続特典のワインは、どちらへお届けしますか?
☐ 申込者住所 ☐ 別お届け先住所 ※必ずご記入下さい。

輸入代行 株式会社 ビッグ・エス
〒761-0101 香川県高松市春日町1627-1 TEL 087-843-7711 FAX 087-870-0355
屋島店 TEL 087-844-0831 三木店 TEL 087-898-8700
郷東店 TEL 087-881-7755 高瀬店 TEL 087-56-2555
浅野店 TEL 087-889-0010 丸亀店 TEL 0877-58-1122

店(館) 受付者 印

第5回 ビッグ・エス 全国ドイツ語スピーチコンテスト開催

株式会社ビッグ・エス主催『第5回全国ドイツ語スピーチコンテスト』を、平成16年10月23日(土)13:00より、香川県文化会館にて開催いたします。一地方企業が開催致します全国規模のコンテストで例年ルフトハンザドイツ航空会社様の協賛、そしてドイツ総領事館様をはじめ多数のご後援をいただいております、いまや日本全国のドイツ関係者だけでなくドイツ本国からも注目されております。

お問合せ窓口 株式会社 **ビッグ・エス**

実行委員会 元木/松川

TEL:087-843-7738 FAX:087-843-7761

E-mail:info@big-s.jp http://www.big-s.co.jp

弊社(株式会社 ビッグ・エス)は、10月23日(土)午後1時から香川県文化会館にて、『第5回ビッグ・エス全国ドイツ語スピーチコンテスト』を開催致します。同コンテストは弊社が地域貢献・国際交流の一環で毎年開催しているものです。昨年は一昨年と同様、審査委員長に大阪神戸ドイツ連邦共和国総領事館総領事ドクター・ヨハネス・プライジンガー様を迎え盛大に行われました。コンテストには日本全国東京から沖縄まで30名以上の応募があり、プレコンテストを勝ち抜いた12名の参加者の方々が日ごろの練習成果を出し切り、熱い戦いを繰り広げました。

5回目となる今回は、このたび大阪神戸ドイツ連邦共和国総領事館総領事に就任されたカール・ヴォカレック氏を審査委員長に迎え、昨年と同じく香川県文化会館3階芸能ホールにて、12時開場・13時開演で開催が決定しました。

参加者資格は日本に住み、両親ともにドイツ語を母国語としない人で、高校生以上、海外在住期間3ヶ月以内(ドイツ滞在は1回まで)の人。コンテスト内容は、童話や詩などを朗読するコースと、自作ドイツ語原稿を発表する創作コースのいずれかを選択できます。(制限時間は2分間)

審査は発音やスピーチ内容はもちろん、創作努力や小道具を使った楽しい演出なども評価基準となっておりまだドイツ語の勉強を始めたばかりの方でも最優秀賞のチャンスがあります。

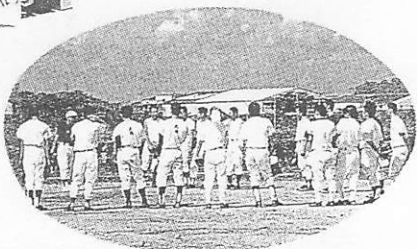
最優秀賞者2名には、ブロンズと賞状、そしてドイツへの往復航空チケット(ルフトハンザドイツ航空会社協賛)を、また優秀賞者には日本国内のゲーテドイツ語講座1学期分の権利(大阪ドイツ文化センター協賛)を、その他副賞にはスノーボード(ウインクレルススポーツアンドレジャー株式会社協賛)をご用意しております。

第1回の開催以来当コンテストはドイツ語を勉強される方々の大きな励みになっており、開催する弊社といたしましても役割の大きさを切に感じております。またドイツ語をこつこつと勉強している全国の人々にチャレンジしていただくことにより、弊社の試みが国際交流の一助となるよう祈念してこのコンテストを企画いたしました。

今後、このような社会貢献活動や地域の皆様との交流をはじめ、さまざまなことに取り組んでいく所存でありますので、何卒ご理解ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。

ご不明な点は「ドイツ語スピーチコンテスト実行委員会」までお気軽にお問い合わせください。

「私の生涯事（自）業」／ 笠 井 強

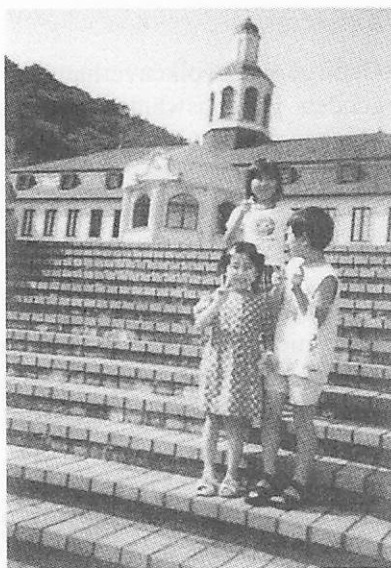
団体名	共に歩むふれ愛サークル・ ^{グループ} G	代表者名	笠井 強
活動分野	まちづくり 国際協力 情報化社会の発展 雇用機会の拡充	学術・文化・芸術・スポーツ 男女共同参画 経済活動の活性化 ボランティア活動の支援等	環境保全 子どもの健全育成 職業能力の開発
活動内容	○ 伝統・工芸・芸術品の奨励と促進 ○ スポーツ・音楽等で青少年育成への協力 ○ 伝統的衣食住等における継承保存文化との交流 ○ 街道・広域文化の継承への提言や企画協力 ○ 国際交流事業の重要性と将来への発展ある輪の広がりに支援 ○ その他のボランティア活動へのサポートとしての支援		
活動の目的	○ 福祉豊かな街作りで、地域のより一層の活性化への支援 ○ 地場産業の活性化と発展への支援 ○ 文化交流事業円滑と信頼の輪が拡大し、より進展するように支援		
分類	任意団体	 	
主な活動地域	主に県内及び県外		
会費	なし（自主登録による）		
会員数	約 70 人（グループ本部のみ） （内 アクティブな会員 13 人） （他平成15年度中学3年生44名）		
主な活動頻度	随時 月 5～10 回程度・年 80 回程度		
連絡先	担当者 笠井 強 （ホームページ担当:大西順一郎 0877-28-2551） 住所 〒763-0091 丸亀市川西町北 669（「さぬき夢アイス」消費促進交流会事務局兼） 電話 0877(21)5192 FAX 0877(21)5189（急ぎの場合はメールではなく FAX をお送り下さい） E-mail jun-3711@themis.ocn.ne.jp（ID 番号 knpo0006 ・ パスワード TOMONI） HP アドレス URL://www8.ocn.ne.jp/~yumeice/index.htm		
《団体、活動のPR・コメント》 この活動は香川県ボランティア情報誌の「ひまわり 53 号」の表紙に掲載されました。 特に、「さぬき夢アイス」消費促進交流会（香川県下の自治体や団体で構成）の『さぬき夢アイス』は各イベントでは大好評です。そして 11 月 1 日の「全国スポーツレクリエーション祭（略称:スポレク香川 2003）」では総合案内所前ブースでパニックになるほどの人気です。また、全国どこからでも注文で送ることにもなり『香川の食文化』の貢献も大です。 次に「香川県下中学 3 年生硬式野球交流教室」は、今では行政や自治体等の協力もあり全国から指導要領の問い合わせがきています。			



感想文

「俘虜たちの悲しみと楽しみ」

間島 由佳（香川大学附属高松小学校5年）



私は、『父の過去を旅して』という本を読んで、人を尊敬することや知らない人にもやさしくする気持ちを学びました。

この本の内容は、第一次世界大戦で日本に負けたドイツ人が、日本につれてこられ、日本の「板東ドイツ俘虜収容所」での生活を書いた文や、この本の作者の安宅温さんの父ヘルトレさんの過去をさぐった物語です。

この物語に出てくる松江所長とは、「板東ドイツ俘虜収容所」の所長です。松江所長は、俘虜にやさしくしていたので俘虜たちに人気があり、みんなの希望をかなえてくれる所長です。もし私が所長だったら、俘虜にやさしくし希望もかなえてあげようと思いますが、松江所長には勝てないと思います。

反対に私がもし俘虜だったら、自分の家がこいしいけど地元の人たちと教えあったり、豊かな自然と遊んだりしたいと思います。

今、その「板東ドイツ俘虜収容所」の近くに「鳴門市ドイツ館」が建っており、俘虜たちの生活や音楽活動がよく分かる資料館です。

では、なぜ「鳴門市ドイツ館」ができたのでしょうか。ここは、ドイツ兵俘虜と地域の人々との交流を記念して作られました。そのほか、国際交流を深めていこうとする資料がかざられています。

俘虜たちが作った物でいまでも残っているのは、ドイツ橋という橋です。この橋は、石で作った橋です。そのほか、ボウリングの球や松江所長へのビールジョッキがあります。その中で松江所長へあげたビールジョッキは、大谷焼で作りました。それは、日本の人から教わったことを生かして作ったものです。これこそ交流です。

私は、松江所長のようにひとりひとりの積極的な生き方が、よい社会をつくり社会がよくなれば、そこにいる自分は生きやすくなると思います。私がこれから夢見ている世界は、平和で一人からみんなへと交流を深めていける世界です。

（鳴門市ドイツ館館報『Ruhe ルーエ』第8号，2004年2月）

Freundschaftsreise nach Takamatsu

Marianne Mönch
(Vorsitzende der DJG Bonn)

Im März 2004 hatte ich die Gelegenheit, mit 23 Deutschen und 7 Japanern an einer Reise durch Gebiete von Kansai und Kagawa teilzunehmen. Die Deutschen waren Mitglieder von DJGen in Bad Säckingen, Berlin, Bonn, Frankfurt a.M., Oldenburg., Würzburg und Sachsen. Die Japaner kamen von der JDG Kobe, angeführt vom Präsidenten der Gesellschaft, Prof. Kurosaki, der auch der Organisator und Leiter der Reise war.

Am ersten Tag führte die Reiseroute über die Insel Awaji zum Deutschen Haus bei Naruto (Lager Bando) und nach Tokushima. Am folgenden Tag, dem 22. März, stand ein Besuch in Takamatsu auf dem Programm

„Ô ame“ meldete der Wetterbericht für diesen Tag. Das Sanuki-Gebirge war wolkenverhangen. Die hübschen alten Dörfer, die durch die Nässe sich tief verneigenden Bambuswälder, die zarten Pfirsichblüten im kalten Märzwind erfreuten uns trotz der heftigen Regenschauer.

In Kotohira wurden wir von Frau Watanabe Sachiko und Frau ..?...., Mitglieder der JDG Kagawa, freundlich begrüßt. Nach dem sehr feuchten Besuch des Kompira-Schreins zeigten sie zeigten, wie man leckere Sanuki-Udon mit Stäbchen essen kann.

Mein Herz schlug vor Freude höher als wir Takamatsu erreichten. Für mich war es der vierte Besuch dieser Stadt, die ich lieb gewonnen habe. Regen im schönen Ritsurin-koen! Wie schade! Auf dem Yashima-Plateau konnte man die Schönheit der Setonaikai nur erahnen. Auch Shikoku-mura hätte bei Sonne mehr Freude gebracht. Aber wir waren trotzdem in guter Stimmung.

Viel heiterer wurde es, als wir in Takamatsu auf einer Straße plötzlich Leute mit einer großen deutschen Flagge sahen. Schon wurde unser Bus von freundlich grüßenden jungen Japanern in den Hof der Firma BIG'S Co. gelenkt, wo uns Herr Osaka Yasuhiko, ein uns bekanntes Vorstandsmitglied der JDG Kagawa, zusammen mit seiner Frau und seinem Sohn herzlich begrüßte. Einen „88-Yen-Shop“ hatte noch niemand von uns Deutschen erlebt. Wir wurden mit je 5 Gutscheinen beschenkt und durften in 10 Minuten auswählen, was das Herz begehrte. 15 Minuten später saßen wir in fröhlicher Stimmung mit unseren 5 erworbenen Schätzen wieder im Bus. Alle waren begeistert von dieser Idee.

Im ANA Hotel Clement wurden wir freundlich willkommen geheißen. Herzlich empfing uns Ai Nagasawa, unsere frühere Austausch-Studentin, die an der Hotelrezeption arbeitet. Viel Zeit zum Plaudern blieb leider nicht, denn es nahte der Höhepunkt der Reise, eine Begrüßungsparty der JDG Kagawa, unter der Leitung von Präsidentin Nakamura Toshiko.

Mit Liebe war alles vorbereitet worden. Jeder deutsche Gast wurde mit einer Briefkarte und zwei Buchzeichen mit gepressten Blumen beschenkt. Im Nu war ich umringt von bekannten Kagawa-Mitgliedern, die ich in Bonn oder Takamatsu früher kennen gelernt hatte. Ich kam mir vor, als wäre ich nach langer Zeit wieder in meine Heimat zurück gekommen. Aber auch die anderen Deutschen fühlten sich sofort wohl und von den ca. 60 anwesenden JDG Mitgliedern herzlich aufgenommen. An den runden Tischen wurden die deutschen Gäste gleichmäßig verteilt, so dass Japaner und Deutsche in guten Kontakt kommen konnten.

Frau Nakao Yuki, mit einem hübschen Kimono bekleidet, und Herr Sugioka Kuzuyuki führten mit Charme perfekt in japanischer und deutscher Sprache durch ein wunderschönes Programm. Ich freute mich besonders, dass das Koto- und Shakuhachi-Ensemble Hôgaku Kenkyukai ein Potpourri aus mir wohl bekannten japanischen Kinderlieder-Melodien vortrug. Die Zuhörer dankten mit großem Beifall. Besonders warmherzig hieß Präsidentin Nakamura Toshiko alle Anwesenden willkommen. Dr. Kimura Yoshitsugu, Präsident der Kagawa Universität, hielt die offizielle Begrüßungsansprache. Sehr

beeindruckend war die Aikido-Vorführung von Professor Nishihara Hiroshi zusammen mit seinem jungen Schüler. Auch die Tanzeinlage von Frau Kanachi Kiyoko erfreute alle Gäste.

Das Abendessen war für uns Deutsche eine besondere Gaumenfreude. Man servierte uns ein sehr aufwendiges, abwechslungsreiches Menü. Als wir dann noch einen süßen Kuchen als Nachtisch bekamen, gab es eine besondere Überraschung: in einigen der Gebäckstücke war jeweils eine Bohne versteckt. Wer eine erhalten hatte, wurde mit einem hübschen „Prinzessinnen-Ball“ belohnt. Ich gehörte zu den glücklichen Gewinnern!

Besonders nett empfanden wir, dass wir uns im Verlauf des Abends selbst vorstellen durften. Geduldig hörten uns alle Anwesenden zu, ein Zeichen von besonderer Höflichkeit.

Viel zu schnell eilten die schönen Abendstunden vorüber. Die Zeit reichte gerade noch für einige deutsche und japanische Lieder, die wir gemeinsam sangen. Dann hieß es Abschied nehmen von so vielen Bekannten und Freunden, denn am nächsten Morgen fuhr die deutsch-japanische Gruppe weiter. Das Ehepaar Meise aus Bonn (Frau Meise ist Vorstandsmitglied) und ich konnten noch 1 ½ Tage in Takamatsu bleiben und uns an einem Ausflug nach Shodoshima und einem Besuch in der Stadt Marugame erfreuen.

Rückblickend möchte ich vor allem Frau Nakamura, aber auch dem Vorstand und allen Mitgliedern der JDG Kagawa herzlich für diesen wunderschönen Abend danken. Alle deutschen Gäste waren tief berührt von der herzlichen Aufnahme, dem üppigen Essen, dem unterhaltsamen Programm und den guten Kontaktmöglichkeiten zu den Mitgliedern der JDG. Von Herzen wünsche ich, dass wir in Bonn alle diejenigen begrüßen können, die uns in Takamatsu so verwöhnt haben.

Nochmals besten Dank für alles und hoffentlich ein baldiges Wiedersehen in Bonn.



Ausflug nach Shodoshima

Barbara Meise

(Vorstandsmitglied der DJG-Bonn)

Am 23. März dieses Jahres wurden Frau Mönch, mein Mann und ich in der Halle des Ana Hotels Clement von Frau Nakamura und ihrem Ehemann, Herrn Prof. Nakamura, abgeholt.

Unser Ziel war Shodoshima, die Oliveninsel. Herr Sugioka Kazuyuki begleitete uns als Dolmetscher.

Wir gingen zum nahen Hafen und bestiegen erwartungsvoll ein elegantes Schiff, das uns in 30 Minuten zum Tonosho Hafen auf der Insel brachte. Dort wartete ein Taxi-Kleinbus, der uns zuerst zum Denkmal „24 Augen“ – ein Symbol für die Insel – fuhr. Es zeigt die Lehrerin Oishi mit ihren 12 Schulkindern aus dem Roman von Sakae Tsuboi, der auf Shodoshima verfilmt wurde. Mein Mann und ich kannten die Geschichte nicht. Am Ende dieses schönen Tages würden wir mehr wissen.

Als nächstes bestaunten wir den Kanal, der laut Guinness-Buch als kleinster Kanal der Welt die Insel bei Tonosho durchschneidet.

Mit einem Besuch im Gebirge begann unsere Rundfahrt um die Insel. Freche, freilebende Affen bettelten am Bus um Futter, - ein für uns sehr seltenes Erlebnis. Welche Überraschung: Am Aussichtspunkt lagen noch Schneereste! Die Aussicht auf die Kankakei-Schlucht und die Seto-See war durch Nebel eingeschränkt, aber auch dieser verhüllte Blick war durchaus reizvoll.

Wir fuhren hinunter in die Ebene und nahmen im Restaurant Mari ein köstliches japanisches Mittagssmahl ein. Wir hatten das Vergnügen, die Zahnärztin Frau Imauye Ryûko von der Imauye Dental Clinic zu treffen. Neben den kulinarischen Köstlichkeiten erfreuten uns dort aber auch das hübsche Haus und eine sehr schöne, altjapanische Ausstattung.

Frisch gestärkt fuhren wir weiter nach Tano-ura im Südosten der Insel. Im Eigamura für den Film „Nijuyon no hitome“ lernten wir die Geschichte der Lehrerin Frau Oishi und ihrer 12 Schüler kennen. Das alte Schulgebäude, das Lehrerhaus, der Schulbus und die alte Dorfstraße des Filmmuseums erinnerten stark an das Dorfleben in Japan vor dem 2. Weltkrieg.

Inzwischen war die Sonne durch die Wolken gekommen. Das Meer glänzte im Sonnenschein.

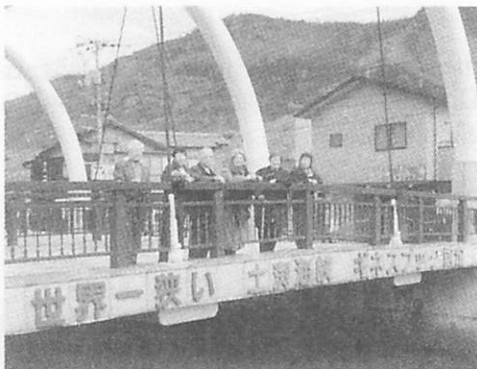
Wir hielten noch am Olivenpark, in dem mediterrane Pflanzen üppig wuchsen. Die Mimosen waren gerade in voller Blüte – für uns ein wunderschöner Eindruck, denn in Deutschland wachsen keine Mimosen.

Der nächste Halt war bei einer Somen-Fabrik, wo wir die Herstellung der hauchdünnen, weißen Nudeln beobachten konnten.

Zum Abschluss fuhren wir zur „Straße der Engel“, den 3 Inseln, die man bei Ebbe zu Fuß erreichen kann. Den Spaziergang konnten wir leider nicht ganz machen, da wir pünktlich zur Fähre gelangen mussten. Aber wir beobachteten gespannt die Frauen und Kinder, die Muscheln und Seetang sammelten.

Nach dem Abschied von dem freundlichen Taxifahrer fuhren wir mit der Schnellfähre zurück nach Takamatsu, wo wir uns vom Ehepaar Nakamura und von Herrn Sugioka herzlich verabschiedeten. Wir hatten einen wunderschönen Tag mit vielen neuen, unvergesslichen Eindrücken verlebt und danken allen sehr herzlich, die ihn uns ermöglicht haben.

P.S. Es ist noch nachzutragen, dass wir ein halbes Jahr später in der DJG-Bonn den Film „Nijuyon no hitome“ sahen. Wir waren von der Geschichte sehr berührt und erinnerten uns dabei gerne an unseren Aufenthalt auf Shodoshima.



Kontakte mit Mitgliedern der JDG Kagawa im Jahr 2004

Die Brücke der Freundschaft zwischen der JDG Kagawa und der DJG Bonn kann nur gepflegt werden durch den gegenseitigen Kontakt der Mitglieder. So waren wir sehr glücklich, dass **Hiroko Suzuki**, die zur Zeit in St. Augustin studiert, beim Japantag im Bonner Rheinauenpark sich als Model zur Verfügung stellte. Charmant zeigte sie den vielen Gästen, wie man sich anmutig mit einem Kimono bewegt.



Mie Myojin war schon oft in Bonn. Als Homestay-Gast, als Studentin in Wiesbaden, als Praktikantin bei einer Bonner Zeitung, als Doktorantin in Vallendar, als lieber Gast bei Bonner Freunden – immer ist Mie-san herzlich willkommen.



Ende September lud die DJG Bonn zu einem Lichtbilderabend über Kagawa ein. Der Anlass war das **10 jährige Bestehen des Partnerschaftsvertrags** mit der JDG Kagawa. **Izumi Hashizume (geb. Nakamura)** und ihr **Gatte** überbrachten eine Grußbotschaft von Präsidentin Nakamura Toshiko.



平成 15 年度香川日独協会事業報告

平成 15 年

4 月 6 日 (日) 豊橋日独協会会員 20 名との交流会 (レストラン「ミケイラ」にて)



四国村にて

- 7 日 (月) 豊橋日独協会会員と琴平金丸座で「こんぴら歌舞伎」を鑑賞
- 4 月 25 日 (金) 「henschel quartett と 蓼沼恵美子の室内楽の調べ」演奏会に協力
- 4 月 27 日 (日) 第 1 回理事会 総会にむけての諸審議 高松市内
「香川日独協会会報」第 11 号原稿募集、「ドイツ語同好会」案内発送
- 5 月 22 日 (木) (財)高松市国際交流協会 情報交流会に参加 (横山事業企画委員出席)
- 6 月 1 日 (日) 平成 15 年度香川日独協会総会 (全日空ホテルクレメント高松 2F)
平成 14 年度事業報告、決算報告・承認される。
平成 15 年度事業計画、予算・承認される
新理事 2 名の承認 河合 幹夫氏、東原 實氏
事業企画委員会、編集委員会、情報交流委員会の各委員紹介。
ホームページ開設の案内
ドイツ人 ウベ・ワルターさんの飛び入り尺八演奏で会がなごむ。



- 6 月 21 日 (土) 第 2 回理事会 アイパル香川 第 1 会議室
- 6 月 24 日 (火) (財)日独協会連合会の総会で選任された古森重隆氏が全国日独協会連合会
会長に、前会長 樋口廣太郎氏は名誉会長に就任された。
- 7 月 13 日 (日) 日帰りバスツアー 「ビア・パーティ in アサヒビール園」



タオル美術館（愛媛県越智郡朝倉村）を見学、アサヒビール四国工場の説明を聞いたあとビール園でふんだんの食事とビールをいただく。

広瀬歴史記念館を訪れあとは一路 帰路に向かう。（株）アサヒビール協力

7月26日（土）平成15年度国際インターンシップ交流会

香川大学工学部にて （東原理事出席）

7月26日（土）情報交流委員会の初会合 8名参加

9月20日（土）第4回 B.S 全国ドイツ語スピーチコンテスト を後援

香川県文化会館3F芸能ホールにて

9月20日（土）Bonnからのホームステイ2名を受入

Weczorek Paul 中村 賢二郎 宅（9月20日～27日）

Killmann Martin 国方 秀昭 宅（9月20日～26日）



Weczorek Paul（男木島神社）



Killmann Martin（金刀比羅宮）

9月21日（土）第11回香川チター音楽祭を後援（高松テルサにて）

10月3日（金）ドイツ統一記念日（大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館にて）

10月5日（日）ドイツ週間行事

1、講演会「ドイツ兵俘虜と香川」 アイパル香川 第1会議室

講師 鳴門市ドイツ館 館長 田村一郎 先生

丸亀エンゲル祭実行委員会からも参加

2、写真パネル展 アイパル香川 ロビーにて

大正3年、青島からドイツ兵 330 人が俘虜として丸亀・塩屋別院に 2 年半滞在した。その間ドイツ兵俘虜たちが撮影した写真を展示。

10月12日（日）「2003かがわ国際フェスタ」に参加出展（事業企画委員会担当）

1、展示部門 1 丸亀エンゲル祭実行委員会所蔵の写真パネルを展示

2 川崎昭子会員所蔵のドイツのおもちゃ 約100点を展示

2、販売部門 ドイツグッズの販売（観光誌、地図、童話本、プレッツェル、等）

10月13日（月）香川日独協会発足記念日

10月17日（金）Bonn 日独協会との姉妹提携記念日

11月6日（木）「初めてのドイツ語会話」講座・Glück がはじまる。

11月9日（日）2003「かがわ第九」演奏会を後援（香川県県民ホールにて）

3月22日(月) 全国日独協会連合会総会に出席のドイツ人21人が観光のため来県、琴平栗林公園、屋島四国村を見学。夕刻より交流会を開く。ドイツ各地8ヶ所の独日協会役員、神戸日独協会からの客人らをあわせ80余名の交流会となった。香川県庁邦楽研究会のさくら変奏曲で客人が入場し、木村香大学長の乾杯で開宴。邦楽童謡メドレー、西原香大教授による合気道の演武、金地会員の邦舞など和気藹々にすぎ、サプライズ・ケーキでかがり手まりが当選者に渡されると一段と会が沸きたった。最後は Berlin 独日協会会長 Dr.haasch 氏のリードでドイツの歌メドレーで盛り上がり1本締めでお開きとなった。

(全日空ホテルクレメント高松にて)



11月24日(月) 第3回理事会を開催 アイパル香川 第3会議室

11月26日(水) 独日文化交流育英会よりドイツ菩提樹のご寄贈をうける。(6本)

ドイツより空輸され、丸亀エンゲル祭実行委員会に4本、小学校1本、
県民いこいの森・公淵公園に1本定植される。

12月14日(日) 第3回エンゲル祭を後援 (丸亀市にて)

植樹式典 丸亀・親水公園まるみらい広場にドイツ菩提樹を植樹する(2本)
中村会長、武部理事、山下晃会員、西川欽也会員、曾根照正会員出席



ドイツ菩提樹植樹祭
(H15. 12. 14 丸亀・親水公園まるみらい広場)

記念講演会 講師 高橋 輝和(岡山大学文学部教授)

演題 「ドイツ兵と米国大使館員の見た丸亀俘虜収容所」

12月14日(日) ドイツ映画 (ホールソレイユにて)

「名もなきアフリカの地で」本年度アカデミー賞受賞作品鑑賞。

12月23日(火) Weihnachtsparty を楽しむ。114 銀行本店 16 階レストラン・グランリー
ガから中央公園・冬の祭りを眺めながらクリスマスソングを唄う。



マンドリン：宮武省吾夫妻

平成16年

3月15日から17日 全国日独協会連合会総会が神戸日独協会主催・神戸で開催される。

【表紙】

フリードリヒ・シラー (1759～1805)

今年 2005 年は、シラーの没後 200 年にあたります。シラーは、ベートーヴェンの第九交響曲の歌詞《歓喜に寄す》(An die Freude)の原作者として有名ですが、ヴェルディの《ドン・カルロ》やロッシーニの《ウィリアム・テル》などのオペラの原作者でもあります。ゲーテとシラーの墓はワイマールにあるそうですが、私はまだ一度も訪れたことのない町です。

リヒャルト・シュトラウスの《サロメ》が初演されたのは、1905 年のドレスデン。という訳で、今年は《サロメ》初演 100 周年の年になるそうです。ドレスデンでは、2 月末から 3 月上旬にかけて、シュトラウス週間が開催され、《サロメ》も新演出で上演されます。3 月 8 日～10 日の 3 日間、ドレスデンに滞在すると、《アリアドネ》《サロメ》《エレクトラ》というシュトラウスの 3 つのオペラが続けて見ることがわかりました。3 月のドイツ旅行、ドレスデンとワイマールもスケジュールに加えることにしたのでした。

香川日独協会会報 第 12 号

2005 年 3 月発行

発 行 : 香川日独協会事務局
Japanisch-Deutsche Gesellschaft KAGAWA
〒760-0017 香川県高松市番町 4-4-20
Tel: 087-861-6820

発行責任者 : 中村 敏子 (会長)
編 集 : 最上 英明
印 刷 : (株) 万成社